仙台市文化財調査報告書第65集

仙台平野の遺跡群Ⅲ

――昭和58年度発掘調査報告書――

1984年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第65集

仙台平野の遺跡群Ⅲ

——昭和58年度発掘調査報告書——

１９８４年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序　　文

名取川・広瀬川・七北田川流域に広がる仙台平野や、西部と北部に伸びる丘陵には、何万年前もの人間の生活の証しが発見されています。昔から住みよい場所であったのでしょう。それらの事柄は、今年度刊行しました「仙台市文化財分布地図」にも表示されています。本市内の「周知の埋蔵文化財包蔵地」としては、432個所が登載されていますが、その内容等については、年毎にその内容の究明がなされつつあります。

近年、周囲の丘陵や田畑が各種の開発により、大きく旧来の街の姿がかわってきている現況にあります。新しい道路、新しい鉄道、新しい宅地……が生み出される時、我々の祖先が伝えてくれた貴重な遺産である文化財が減じつつあることも事実であります。これら地下に埋れている文化財は、一度、壊されれば再生できないもの、代替性のないものでもあります。文化財保護行政は、このようなことに十分配慮しながら、市民と一緒になって保護し、継承していきたいものであります。

仙台市教育委員会は、昭和56年度より国庫補助事業として、「仙台平野の遺跡群」という調査部門を設け、遺跡内の小規模開発（個人住宅の建築等）に対応してまいりました。昭和58年度は、前年度に比べ発掘届は180件（1月31日現在）と60件ほど少なくなっていますが、その中で、保護行政上、調査すべきもの7件について、本報告書は取り上げております。これらの調査、整理、報告書の作成にあたっては、多くの方々の協力や助言、指導を得てまとめたものであります。心から感謝申し上げる次第であります。

最後に、本書が多くの方々の研究資料等に活用され、文化財保護の一助としてご活用いただけることを願うものであります。

昭和59年3月

仙台市教育委員会
教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は仙台平野の遺跡群の昭和58年度緊急遺跡範囲確認調査の報告書である。

2．本調査は国庫補助事業である。

3．本書の作成にあたり、次のとおり分担した。

本文執筆……佐藤　隆・金森安孝・斎野裕彦

遺構トレース……斎野・斎藤誠司・安喰真由美・大場拓俊

遺物実測……斎野・荒井　格・三浦秀樹・菊地宣之

遺物トレース……斎野

遺構写真撮影……金森・斎野

遺物写真撮影……斎野・荒井・庄子信広・原　充広

ウォーター・セパレーション……古川陸子・佐藤　薫

編　　集……金森・斎野・庄子・斎藤信次

4．本書中、郡山遺跡の調査報告は概報とし、詳細については仙台市文化財調査報告書「郡山遺跡Ⅳ－昭和58年度発掘調査概報」の中にまとめ、その遺構略号は次のとおりとした。

SB　建物跡　　SD　溝　跡　　SI　竪穴住居跡

SK　土　壙

5．本書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・佐原：1973年）を使用した。

6．地形図は建設省国土地理院発行の5万分の1「仙台」を使用した。

7．本調査は、昭和58年4月に着手し、昭和59年3月に全ての事業を終了した。

目　　次

序　　文
例　　言

Ⅰ．調査計画と実績…… 1

Ⅱ．発掘調査報告…… 3
〔1〕富沢水田遺跡…… 3
遺跡の位置と環境
周辺の遺跡
鳥居原地区…… 7
1．調査に至る経過　2．調査の方法　3．層　位
4．発見遺構　5．出土遺物　6．ま と め
下ノ内浦地区……25
1．調査に至る経過　2．発見遺構・出土遺物　3．まとめ

〔2〕郡山遺跡……28
1．遺跡の位置と環境
2．調査概要
(1) 第36・39次発掘調査　(2) 第37次発掘調査
(3) 第38次発掘調査　(4) 第40次発掘調査

Ⅰ．調査計画と実績

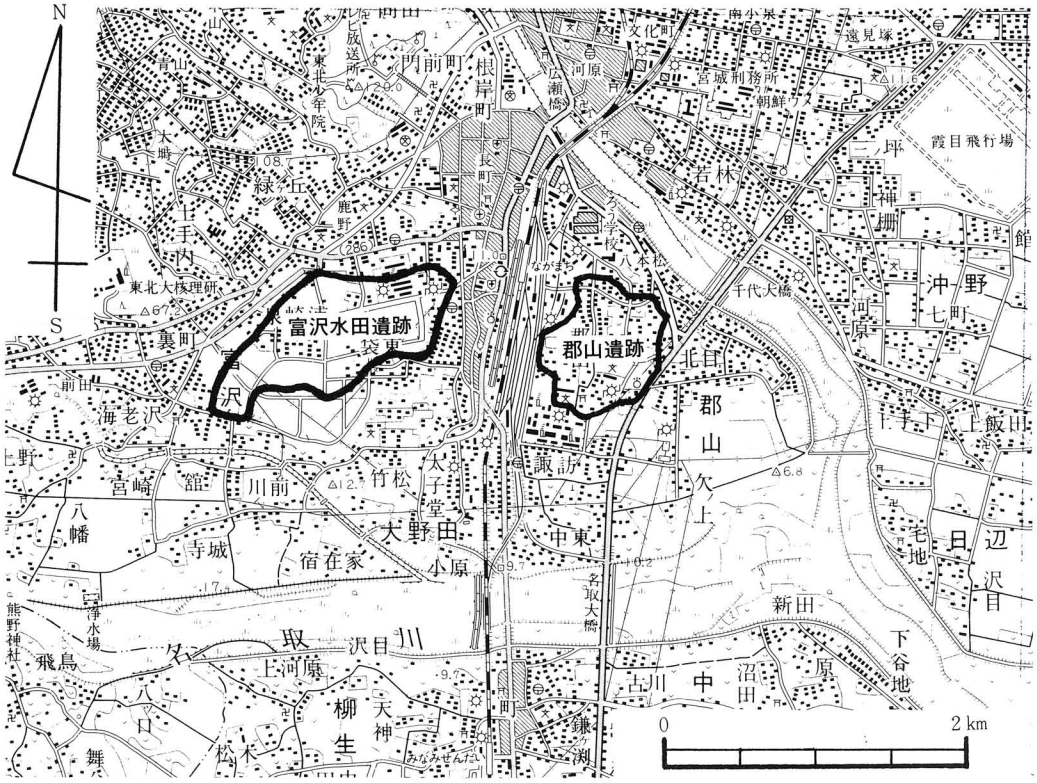
仙台市内には、現在432件の周知の埋蔵文化財包蔵地がある。これらは、私達の祖先が残してくれた貴重な文化財であり、人間の生活の証である。私達はこれらを保護しながら、市民生活の中で活用し、後世の人々に伝えていきたい。この文化財は、「仙台市文化財分布地図」に登載されており、一般市民へ公開されている。最近は、開発行為やビルや家屋の建築の際には、社会教育課文化財調査係の窓口を通るようになり、遺跡に係る無届け工事はなくなってきており、ここ三年間の遺跡発掘届・通知は、200～260件となり、増加の傾向にある。その届・通知の中で、約80％は立会調査であるが、約20％は地下の遺構が損なわれる可能性がある。

そこで、仙台市教育委員会は、上記の届・通知の中の一部について昭和56年度から国の補助を得て、仙台平野の遺跡群の発掘調査を実施し、市内の遺跡の範囲確認、性格究明を行うこととした。そこで、下記のような実施計画を立てた。

1．目　　的　仙台平野の分布する遺跡群にかかる個人の小規模な開発（個人住宅の建築等）に伴う発掘調査

2．調査面積　1,000㎡

3．調査期間　昭和58年４月～昭和58年12月



第１図　発掘調査遺跡位置図

4．調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

(課長)永野昌一　(主幹)早坂春一　(係長)佐藤　隆

(主事)田中則和・柳沢みどり・金森安孝・斎野裕彦

同課文化財管理係

(係長)大沢隆夫　(主事)岩沢克輔・山口　宏

調査指導　郡山遺跡指導委員会(委員長　伊東信雄)　尚絅女学院短期大学　木村中外

東北大学農学部　星川清親・庄子駒男・山田一郎

調査・整理参加者　三浦秀樹・茂泉　満・小林　充・管野政彦・長谷部祐二・菊地宣之・今野富美子・赤井沢きすい・板橋やす・安喰真由美・藤本智彦・赤井沢　進・赤井沢千代子・谷津妙子・高橋りえ・斎藤誠司・神成浩志・佐藤　豊・古川陸子・原　充広・庄子信広・斎藤信次・丹野正作・相沢勝利・高橋千登勢・猪股幸子・小林てる・小林国子・工藤えなよ・寺田ゆう子・加賀美恵子・高橋かめよ・佐藤　薫・星　昌彦

本事業は今年度で三年目を迎えた。調査個所は、国庫補助事業として実施している郡山遺跡範囲確認(5ヶ年計画の4年次)と関連する個所が多く、そのチームと協力体制を組み、官衙遺構の究明に大きな成果を得た。また、長町地区の2個所の調査では、昭和56年度以降、究明されつつある水田遺構の広がりを確認することができた。ここ三年間の本事業は、仙台市の南部での調査が多かったので、今後は、北部、東部の未調査の遺跡について、取組む必要がある。

(佐藤　隆)

第1表　発掘調査実績表

遺跡名 / 事項	富沢水田遺跡（C－301）		郡山遺跡（C－104）				
	鳥居原地区	下ノ内浦地内	第36次発掘調査	第37次発掘調査	第38次発掘調査	第39次発掘調査	第40次発掘調査
所在地	長町字宮田17-4	仙台市富沢字中谷地30-1・下ノ内浦32	郡山五丁目148－14	郡山二丁目37-25	郡山五丁目151-3	郡山五丁目149-2	郡山三丁目128-57
申請者住所	長町二丁目1-39	仙台市長町南三丁目39－10	福室字松堂1-11 高砂住宅CA20-79	土手内三丁目4-7	郡山五丁目8-13	八木山香澄町25-2 鄭政宿舎C－301	郡山三丁目16-14
申請者氏名	㈱庄子デンキ 代表取締役 庄子正文	小関正美・久男	庄子忠雄	豊川種彦	東北発電工業㈱ 仙台事業所長 小川茂夫	畑中　実	堀江　登・貞子
開発内容	店舗建築	共同住宅建築	住宅建築	住宅建築	倉庫増築	住宅建築	住宅建築
対象面積	1,467㎡	381㎡	251㎡	284㎡	904㎡	289㎡	177㎡
調査面積	92㎡	21㎡	9㎡	12㎡	150㎡	16㎡	20㎡
調査期間	昭和58年 11月22日～12月16日	11月4日～11月17日	6月27日～6月28日	7月6日～7月7日	8月29日～10月14日	9月5日～9月12日	10月17日～10月18日

Ⅱ．発掘調査報告

〔1〕富沢水田遺跡

遺跡の位置と環境

宮城県中央部の地形は、山形県境沿いに船形山、面白山を擁し南北に連なる奥羽山脈と、ここより派生する陸前丘陵、さらに東方へ広がる宮城野海岸平野[註1)]よりなる。仙台市近傍では、陸前丘陵を広瀬川と名取川が東流しており、その河間丘陵地を青葉山丘陵、広瀬川以北を七北田丘陵、名取川以南を高館丘陵とそれぞれ命名している[註2)]。両河川は中流域に下刻作用により４～５段の段丘地形を発達させており、丘陵を貫流したのち、沖積作用により宮城野海岸平野を形成してきている。宮城野海岸平野は地理的条件や成因、地質などから地形区分がなされており、仙台市南部の広瀬川と名取川の合流点付近では河間低地を郡山低地、広瀬川以北を霞ノ目低地、名取川以南を名取低地と呼んでいる[註2)]。

富沢水田遺跡は、これら低地の中で郡山低地に所在する。郡山低地は、北東縁と南縁を広瀬・名取両河川により画され、北西縁には長町－利府線[註3)]が走り、青葉山丘陵と名取台地に接している。標高は約７～20m である。当低地では広瀬・名取両河川沿いに自然堤防が良好に発達しているほか、その中央を南北に走る自然堤防も見られる。そして自然堤防の背後には後背湿地が広がっている。富沢水田遺跡は低地西半部の後背湿地にそのほとんどが立地し、標高は９～16m 、面積約80*ha*である。この地域は、北方・南方・東方を自然堤防により囲まれており、南部には名取川の支流である笊川が曲流している。また、中央部には微高地が西方の丘陵より東へ伸びており、遺跡を二分するかのような景観を呈している。

今年度の富沢水田遺跡の調査は鳥居原地区と下ノ内浦地区で行なわれた。鳥居原地区内の今回の調査対象区は遺跡の北東端に位置し（第３図２）、また下ノ内浦地区の調査対象区は遺跡の南端に位置し、隣接する下ノ内浦遺跡を一部含んでいる。（第３図３）

尚、富沢水田遺跡は昭和58年６月３日付で仙台市遺跡台帳に遺跡番号Ｃ－301 として登録されている。登録の理由は以下の通りである。

昭和56年４月から、仮称仙台市体育館建設に伴なう山口遺跡（第３図44）の調査が行なわれていたが、プラント・オパール分析に基づいた調査の結果、昭和57年５月に平安時代の水田跡が検出された。山口遺跡の立地は自然堤防から後背湿地にかけてであり、南半の自然堤防上からは住居跡が、北半の後背湿地からは水田跡が検出された。水田跡はさらに北方に広がる後背湿地に続いているものと考えられ、プラント・オパール分析では平安時代以前の水田跡の存在も予想された。また郡山低地西半部では、昭和56年度より仙台市高速鉄道関係遺跡の調査が行な

われていたが、昭和57年度には後背湿地の路線敷部分の試掘調査が行なわれ、山口遺跡同様平安時代の水田跡が検出されたほか、弥生時代・中世の水田跡が検出されるに及び、郡山低地西半部の後背湿地には水田跡が広く存在することがほぼ確実となった。このため、地形・標高等を考慮して遺跡の線引きを行ない、昭和58年6月3日の登録となった。当遺跡の命名は、遺跡が広範なため字名がいくつかある中の最も代表的な富沢という地名を選び、水田跡が主たる遺跡の性格であることから「富沢水田遺跡」とした。

周辺の遺跡

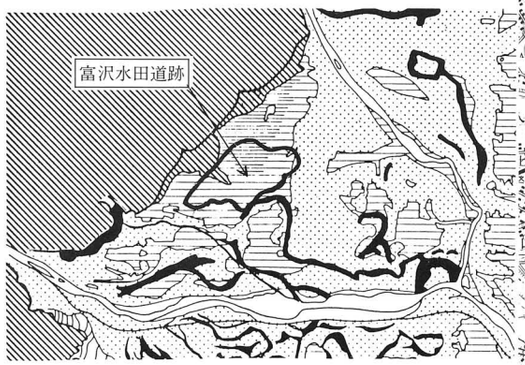
郡山低地やその周辺には旧石器時代から近世に至る数多くの遺跡が分布している。この地域には丘陵・段丘・河川・自然堤防・後背湿地といった地形が展開しており、人類の歴史と密接な関係をもってきている。

旧石器時代の遺跡では名取川左岸の台ノ原あるいは上町段丘上に立地する山田上ノ台遺跡と北前遺跡があり、前期及び後期旧石器時代の遺物を出土している。縄文時代の遺跡は、段丘上に立地する北前遺跡、山田上ノ台遺跡、三神峰遺跡、上野遺跡や自然堤防上に立地する六反田遺跡や下ノ内遺跡がある。現在のところ、沖積平野で検出された遺構としては六反田遺跡の大木8b式期の竪穴住居跡が最も古い。弥生時代以降では、集落跡は稲作の生産域である後背湿地周辺の自然堤防上や段丘の縁辺に立地することが多いと考えられる。弥生時代の水田跡は富沢水田遺跡で検出されているが、これに伴なう集落跡は不明である。しかし平安時代では、富沢水田遺跡で水田跡が検出されており、周辺の平安時代の集落跡との関連が考えられ、この時期には山田上ノ台遺跡や北前遺跡のように、既に後背湿地を離れてより高位の段丘上にも集落跡が検出されている。中世になると丘陵や自然堤防上に舘が作られるようになる。

以上の郡山低地及び周辺の遺跡の分布は現在の知見であり、今後遺跡数の増加が考えられる。特に旧石器時代の遺跡は、山田上ノ台遺跡・北前遺跡と同一段丘では、同様の遺跡の発見の可能性は高く、他の段丘においても、今後の調査に期待されるところが大きい。また、旧石器時代や縄文時代早期の海水準が現在よりかなり低く、その後の海水準変動と名取川の土砂の供給量が極めて大きいものであったこと[註4)註5)]を考えれば、縄文時代以前の遺跡が沖積平野のより深い所から新たに発見されることは想像に難くない。

さて、各時代の遺跡は、その性格が立地条件と不可分のものであることが多く、縄文時代後期・晩期に不明な部分はあるが、弥生時代以降の集落立地は、稲作や土木技術の発達による生産性の向上、生産域の拡大、変化に基礎を置くものと考えられる。各遺跡を空間的・時間的に結びつける上で富沢水田遺跡の存在は大きな意義をもつものと言える。　　（斎野　裕彦）

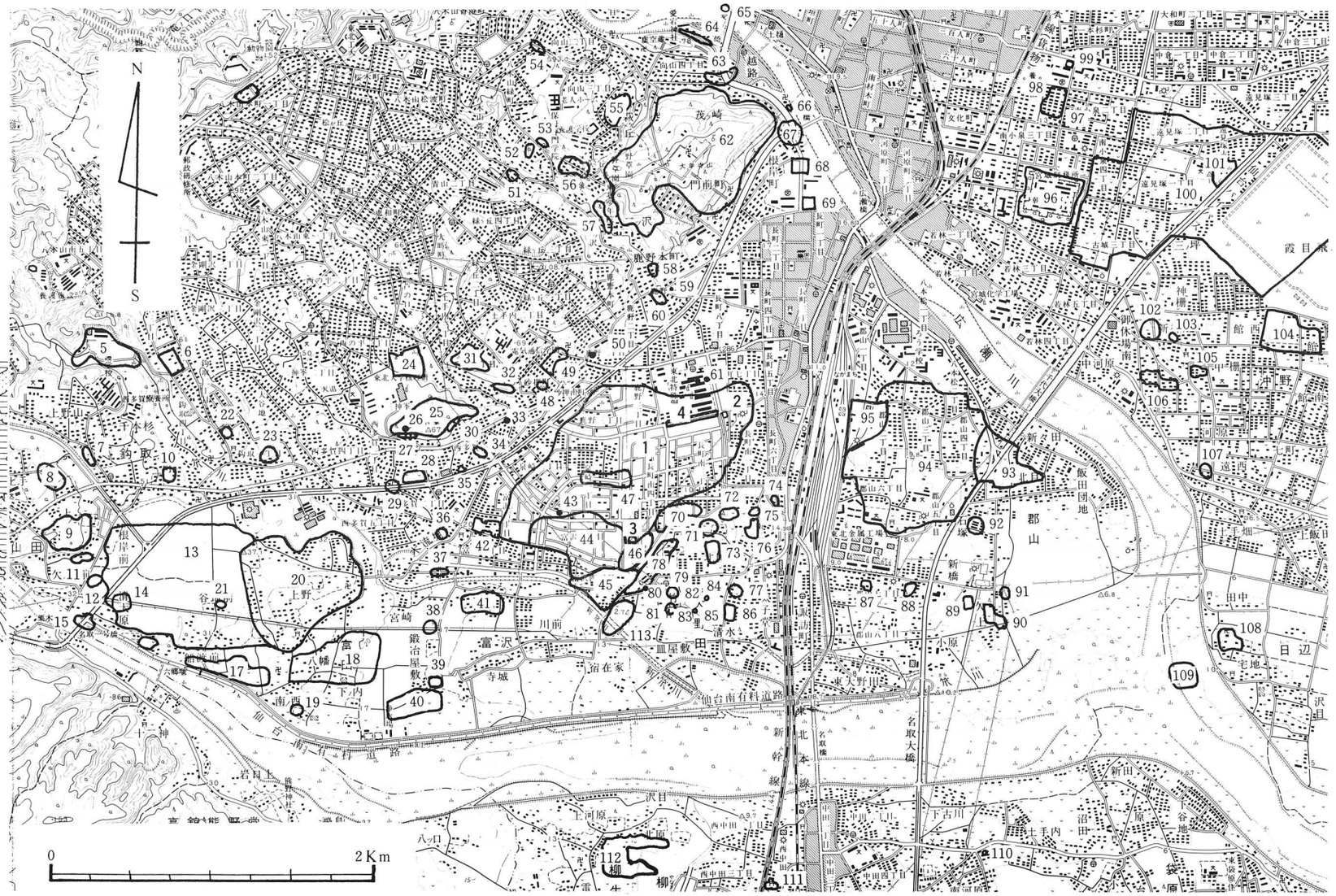
註1．地団研仙台支部編　1980「新編 仙台の地学」
註2．経済企画庁　1967「地形・表層地質・土じょう 仙台」
註3．中田他　1976「仙台平野西縁・長町―利府線に沿う新期地殻変動」『東北地理』第28巻　第2号　P111～120
註4．松本秀明　1981「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』第52巻第2号　P72～85
註5．安田喜憲　1978「仙台湾周辺における後氷期の地形変化・海水準変動と人類の居住」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』P517～594



丘陵段丘　沖積錘　旧河道

自然堤防　後背湿地／低湿部

第２図　周辺の地形分布図



第３図　遺跡分布図

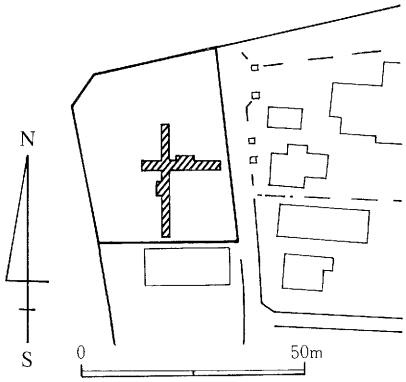
No	遺跡名	立地	種別	時代
1	富沢水田遺跡	後背湿地	水田跡	弥生 平安 中世
2	富沢水田遺跡	鳥居原地区		
3	富沢水田遺跡	下ノ内浦地区		
4	富沢水田遺跡	仙台市高速鉄道関係遺跡鳥居原・中谷地地区		
5	御堂平遺跡	丘陵段丘	集落跡	縄文・平安
6	紙漉山遺跡	丘陵	包含地	縄文
7	上野山遺跡	段丘	包含地	縄文
8	北前遺跡	段丘	集落跡	旧石器縄文,古墳 平安近世
9	山田上ノ台遺跡	段丘	集落跡	旧石器縄文,平安近世
10	町遺跡	段丘	包含地	縄文,古墳,平安
11	汚田通A遺跡	段丘	包含地	平安
12	汚田通B遺跡	段丘	包含地	平安
13	山田条里遺構	段丘	条里遺構	
14	竹の内前遺跡	段丘	包含地	奈良、平安
15	清田原西遺跡	段丘	包含地	縄文、平安
16	清田原東遺跡	段丘	包含地	縄文、平安
17	船渡前遺跡	自然堤防	包含地	
18	南ノ東遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	弥生、平安
19	宮田南西遺跡	自然堤防	包含地	奈袖、平安
20	上野遺跡	段丘	集落跡	縄文(中)・奈良・平安
21	谷地前遺跡	段丘	包含地	平安
22	後田遺跡	段丘	集落跡	縄文・奈良・平安
23	八幡遺跡	段丘	包含地	古墳、平安
24	芦ノ口遺跡	段丘	集落地	平安
25	三神峯遺跡	段丘	集落跡	縄文(前・中)
26	三神峯古墳群	段丘	円墳	古墳(後)
27	富沢窯跡	段丘	窯跡	古墳・奈良・平安
28	原遺跡	段丘	包含地	弥生・古墳・平安
29	西台窯跡	段丘	窯跡	奈良、平安
30	金山窯跡	段丘	窯跡	古墳(5C中～5C後)
31	土手内遺跡	丘陵	窯跡	縄文、奈良、平安
32	土手内窯跡	丘陵	窯跡	奈良、平安
33	金洗沢古墳	段丘	古墳	古墳
34	裏町古墳	段丘	前方後円墳	古墳
35	原東古墳	段丘	包含地	古墳、奈良、平安
36	富沢上ノ台遺跡	段丘	包含地	縄文、平安
37	堀ノ内遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
38	鍛冶屋敷A遺跡	後背湿地	包含地	奈良、平安
39	鍛冶屋敷B遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	縄文、奈良、平安
40	六本松遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	奈良、平安
41	富沢館遺跡	自然堤防 後背湿地	城館	室町
42	富沢清水遺跡	後背湿地	包含地	奈良、平安
43	教塚古墳	後背湿地	古墳	古墳
44	山口遺跡	自然堤防 後背湿地	集落跡	縄文弥生・古墳・平安
45	下ノ内遺跡	自然堤防	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安
46	下ノ内浦遺跡	自然堤防	包含地	縄文・弥生・奈良・平安
47	泉崎浦遺跡	自然堤防 後背湿地	集落跡？	縄文、古墳、平安
48	砂押古墳	段丘	円墳	古墳
49	砂押屋敷遺跡	段丘	包含地	奈良、平安
50	二塚古墳	後背湿地	前方後円墳	古墳
51	青山二丁目遺跡	丘陵	包含地	奈良、平安
52	二沢遺遺跡	丘陵	包含地	縄文
53	八本山緑町遺跡	丘陵	散布地	縄文
54	向山高裏遺跡	丘陵	前方後円墳	縄文
55	萩ヶ丘遺跡	丘陵	包含地	縄文、奈良、平安
56	萩ヶ丘B遺跡	丘陵	包含地	縄文
57	二ッ沢横穴群	丘陵	横穴墓	古墳
58	鹿野屋敷遺跡	段丘	包含地	古墳、奈良、平安
59	一塚古墳	後背湿地	円墳	古墳
60	鹿野一丁目遺跡	段丘	包含地	縄文・弥生・奈良・平安
61	金岡八幡古墳	後背湿地	円墳	古墳
62	茂ヶ崎城遺跡	丘陵	城館	室町・江戸
63	愛宕山横穴群A	丘陵	横穴墓	古墳
64	愛宕山横穴群	丘陵	横穴墓	古墳、奈良
65	土樋一丁目遺跡	段丘	包含地	縄文
66	宗禅寺横穴古墳群	段丘	横穴墓	古墳末～奈良
67	根岸遺跡	丘陵斜面	集落跡か	縄文
68	兜塚古墳	自然堤防	前方後円墳	古墳
69	小兜塚古墳	自然堤防		古墳
70	袋東遺跡	自然堤防	包含地	古墳、平安
71	元袋Ⅱ遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	奈良、平安
72	元袋Ⅲ遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
73	大野田遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	縄文(後)弥生(中)
74	長町六丁目遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
75	長町南遺跡	自然堤防	包含地	
76	新田遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
77	北屋敷遺跡	自然堤防	包含地	平安,中世,江戸,明治
78	六反田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文、弥生、古墳 奈良、平安
79	五反田古墳	自然堤防	円墳	古墳
80	五反田木棺墓	自然堤防	木棺墓	古墳
81	五反田石棺墓	自然堤防	石棺墓	古墳
82	大野田古墳群	自然堤防	円墳	古墳
83	春日社古墳	自然堤防	円墳	古墳
84	王の壇古墳	自然堤防	円墳	古墳
85	鳥居塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
86	長町清水遺跡	自然堤防	古墳	古墳
87	的場遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
88	籠ノ瀬遺跡	自然堤防	包含地	古墳、奈良、平安
89	欠ノ上Ⅰ遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	古墳、奈良、平安
90	欠ノ上Ⅱ遺跡	自然堤防	包含地	古墳、奈良、平安
91	欠ノ上Ⅲ遺跡	後背湿地	包含地	古墳、奈良、平安
92	矢来遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	古墳、奈良、平安
93	北日城遺跡	自然堤防	城館	室町、江戸
94	郡山遺跡	自然堤防 後背湿地	寺院跡	奈良、平安
95	西台畑遺跡	後背湿地	包含地	弥生、古墳
96	若林城跡	自然堤防	城館	戦国～江戸
97	猫塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
98	糞種園遺跡	自然堤防	包含地	平安（後）
99	法領塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
100	南小泉遺跡	自然堤防 後背湿地	集落跡	古墳
101	遠見塚古墳	自然堤防	前方後円墳	古墳
102	砂押Ⅰ遺跡	自然堤防 旧河道	包含地	古墳、奈良、平安
103	神柵遺跡	自然堤防	包含地	縄文,弥生,古墳,奈良
104	沖野館遺跡	自然堤防	城館	中世
105	中柵西遺跡	自然堤防	包含地	弥生,古墳,奈良,平安
106	砂押Ⅱ遺跡	自然堤防 旧河道	包含地	古墳、奈良、平安
107	河原越遺跡	後背湿地	包含地	弥生,古墳,奈良,平安
108	日辺館遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	室町（後）
109	日辺遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	古墳
110	大塚山古墳	自然堤防	円墳	古墳
111	中田神社裏遺跡	自然堤防	包含地	古墳、平安
112	柳生台畑遺跡	自然堤防 旧河道	包含地	奈良、平安
113	伊古田遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
114	松ヶ丘遺跡	丘陵	包含地	縄文

鳥居原地区

1．調査に至る経過

昭和58年９月21日付で、仙台市長町南二丁目１番39号の庄子正文氏より、店舗を建築する旨の発掘届が提出されたことにより今回の調査に至った。

当地区は富沢水田遺跡の北東端に位置することから、遺跡の範囲確認調査が主な目的であり、西方に隣接する仙台市高速鉄道関係遺跡鳥居原・中谷地地区の発掘調査により、平安時代と弥生時代の水田跡が検出されていることから、同様の遺構の存在が予想された。標高は9.5m である。

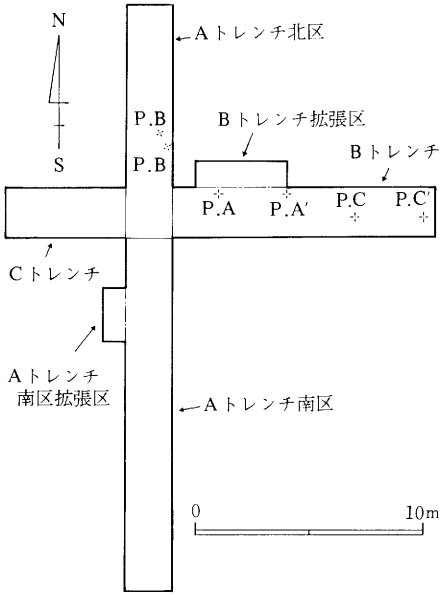


第４図　調査区設定図

2．調査の方法

店舗の建築は、地下遺構を極力損わない工事方法がとられることから、対象面積1,467㎡に対し、調査面積92㎡と最小限度の面積による調査が行なわれた。

調査は幅２ｍの十字トレンチを建物部分に設け、南北方向のものをＡトレンチとし、北区と南区に分け(以下、Ａトレ南区、Ａトレ北区)、Ａトレンチの東をＢトレンチ(以下Ｂトレ)、西をＣトレンチ(以下Ｃトレ)として行なわれた。Ａトレは長さ25.8m、Ｂトレ11.5m、Ｃトレ５.３ｍであり、必要に応じて部分的に拡張した。



第５図　トレンチ配置図

3．層　　位

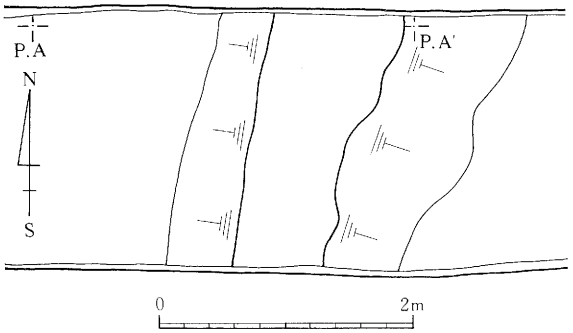
当調査区において認められた基本層位は、１層～12層である。土質の点から、大きく１層のシルト層、２～５層の粘土層、６層以下の泥炭質粘土層[註1)]の３層に分けられる。これらの各層の形成は、１～５層については主に広瀬川による沖積作用に基づくものであるが、６層以下については泥炭の存在が主因であり、ある程度の沖積作用が関与したものと考えられる。

この基本層位は、当調査区西方50～350ｍの仙台市高速鉄道関係遺跡鳥居原・中谷地地区の

調査における基本層位とほぼ同様であり、対応する。これは近接していることと、若干の層相変化はあるにせよ、明瞭な鍵層が存在することによる。また、6層以下の泥炭質粘土層は、泥炭形成時及びそれ以降分解作用を受けている。各層の分解度は、6b層、8層ではさほど高くないが、他の層ではやや高く、7層、9層において著しい。さらに6層以下では脱水収縮作用により、形成時に比べ、層厚は減じており、各層は後世の溝等の開削による地下水位の変動の影響のため、相対的に傾斜していることも考えられる。当地区の立地条件については、6層以下の泥炭質粘土層中に浅存する植物遺体がヨシを主体としていることから、平安時代以前には地下水位の高い、湿地的な性格の強い場所であったと考えられる。

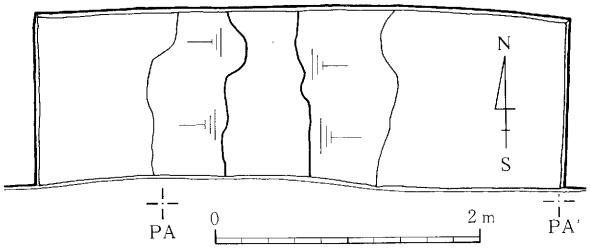
4．発見遺構

(1)　2層上面：Bトレで畦畔を検出した。方向はN−10°−Eである。断面形は扁平な台形状を呈す。上端幅70〜100cm、下端幅180〜230cmである。畦畔の上面と水田面の比高差は、東側では1〜4cm、西側では10〜12cmであり、東側の水田面の方が高い。



第6図　2層上面Bトレ平面図

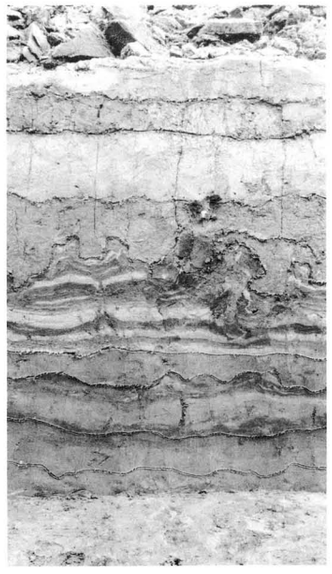
遺物は2層上面及び2層中より、陶器、磁器、土師器、須恵器などの破片のほか、砲弾形の鉄砲玉が出土している。旧耕作土直下でもあり、時期は極めて新しいとは考えられるが、今後、明確な時期を確定する必要があろう。



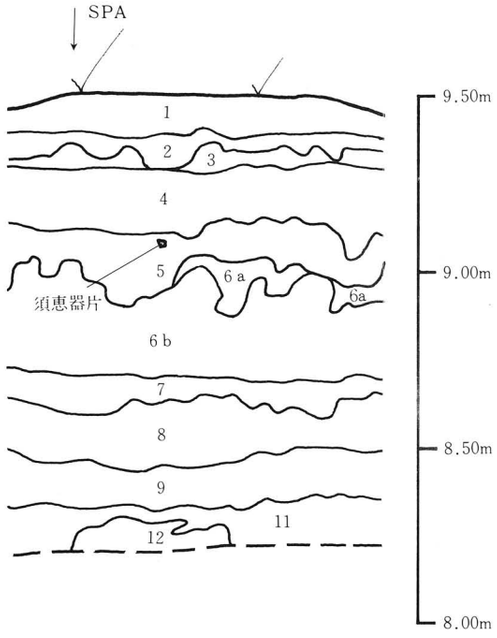
第7図　5層上面Bトレ拡張区平面図

(2)　5層上面：Bトレ拡張区で畦畔を検出した。方向は、真北方向である。上端幅52〜65cm、下端幅154〜188cmである。断面形は台形状を呈すが、立ちあがりは両側ともゆるやかである。畦畔の上面と水田面の比高差は、東側では4〜5cm、西側では約10cmであり、東側の水田面の方が西側より高い。この水田跡は6層以下が泥炭質粘土層であり、酸化鉄の集積層が存在しないことから湿田的性格が強いものであったと考えられる。

遺物は5層中より木片3点の他、須恵器坏の体部破片1点が出土しているが、水田面及び畦畔の上面に灰白色火山灰が見られることと、4層中より表杉ノ入式の土師器坏の破片が7点出土し、そのほとんどが下部出土であることから、平安時代の水田跡と考えられる。



基 本 層 位



第８図　基本層位セクション図

土　層　註　記

１層：５Ｙ4/1灰色シルト。粘性ややあり、しまりややあり。層厚は10～15cm。旧水田耕作土

２層：2.5Ｙ5/1黄灰色粘土。粘性あり・しまりなし。層厚は３～12cm。この層の最上部には、厚さ１～２cmの酸化鉄の集積層が認められる。また層中には酸化鉄斑が見られる。

３層：2.5Ｙ3/1黒褐色粘土。粘性が極めて強い。しまりはない。層厚は０～10cm。この層はＡトレ南区南半とＣトレ西半には認められない。

４層：10ＹＲ5/2灰黄褐色シルト質粘土。粘性ややあり・しまりなし。層厚は10～20cm。層中には縦方向の酸化鉄斑が見られる。この層の上面には部分的に乱れが生じている。下部には灰白色火山灰（註２）が部分的に見られる。

５層：10ＹＲ5/1褐灰色粘土。粘性あり・しまりなし。層厚は０～20cm。この層はＡトレ北区北半においては部分的にしか認められない。この層の上面には、灰白色火山灰が部分的にブロック状（径0.5～４cm）に見られる。５層は平安時代の水田土壌である。

６層：10ＹＲ4/1褐灰色粘土。粘性ややあり・しまりなし。繊維質の植物遺体を多く含む泥炭質粘土層である。この層の上半部は乱れており、上層を６ａ層、下層を６ｂ層と細分される。６ａ層は層厚が10～20cmで、10ＹＲ6/3黄橙色粘土を乱れたブロック状に含む。この層はＢトレ東半には認められない。６ｂ層は層厚が20～30cmで、10ＹＲ6/3黄橙色粘土と互層となる。

７層：５Ｙ5/1灰色粘土。粘性あり・しまりなし。繊維質の植物遺体を多く含む泥炭質粘土層である。層厚は８～15cmである。。

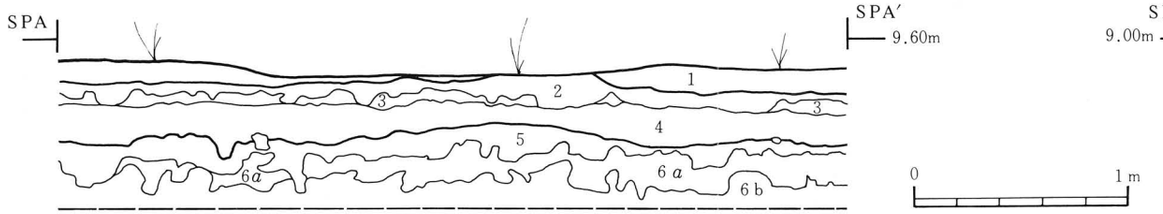
８層：10ＹＲ2/1黒色粘土。粘性ややあり・しまりなし。繊維質の植物遺体を多く含むとともに、部分的に原形を留める植物遺体を含む。泥炭質粘土層である。層厚は10～20cmであり、部分的に乱れが見られる。

９層：５Ｙ5/1灰色粘土。粘性あり・しまりなし。繊維質の植物遺体を多く含む泥炭質粘土層である。ややグライ化している。層厚は10～15cmであるが、20cm程の所もある。この層の最上部には部分的に厚さ1～2cmの10ＹＲ3/3暗褐色粘土がみられる。層中には径２～４cmのモール状の植物遺体が多数見られる（２×２ｍで30～40個体）。また、最下部付近には径２～５mmの凝灰岩（註３）が多く存在し、中には粘土化しているものも見られた。９層は弥生時代の水田土壌である。

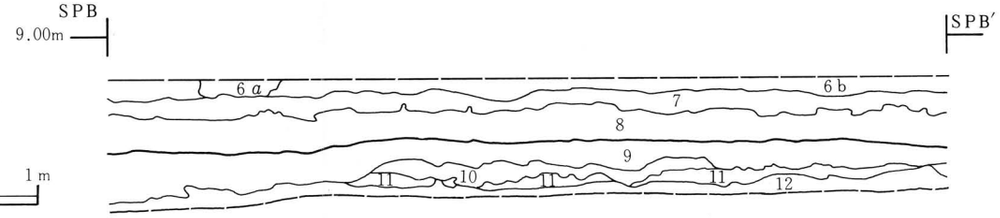
10層：10ＹＲ4/1褐灰色粘土。粘性あり・しまりなし。繊維質の植物遺体を多く含む泥炭質粘土層である。層厚は５～10cmであり、10ＹＲ5/2灰黄褐色粘土をブロック状に含む。この層はＣトレ９層で検出された畦畔下においてのみ認められた層であるが、９層が水田土壌とされる以前には調査区に広く存在した層と考えられることから基本層とした。

11層：2.5Ｙ6/1黄灰色粘土。粘性あり・しまりなし。繊維質の植物遺体を多く含む泥炭質粘土層である。この層の上面には乱れが生じており、これは９層の耕作の影響と考えられる。

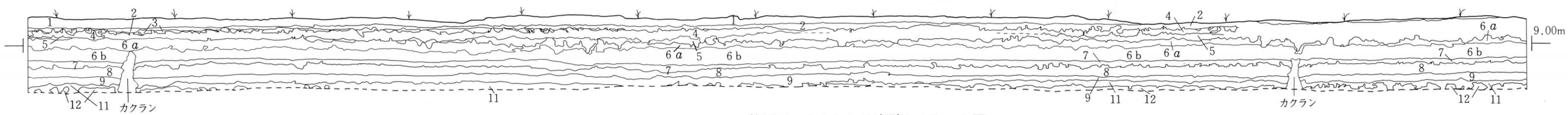
12層：10ＹＲ2/1黒色粘土。粘性あり・しまりなし。繊維質の植物遺体を多く含む泥炭質粘土層である。層厚は５～15cmで、2.5Ｙ6/2灰黄色粘土と互層となる。



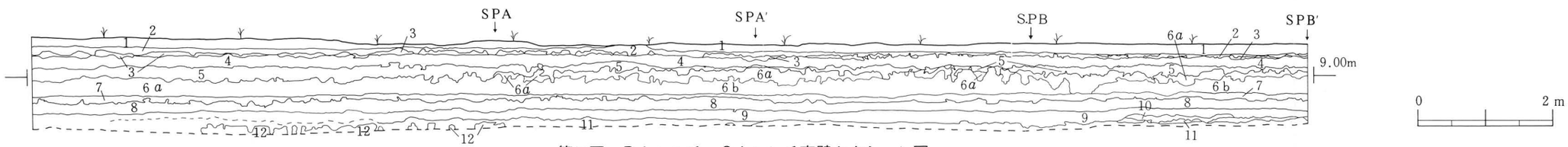
第９図　２層・５層上面検出畦畔セクション図



第10図　９層上面検出畦畔セクション図



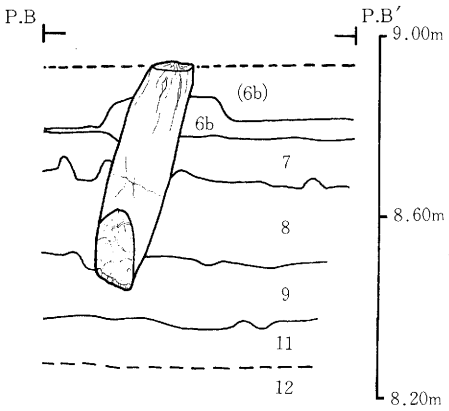
第11図　Ａトレンチ東壁セクション図



第12図　Ｂトレンチ・Ｃトレンチ南壁セクション図

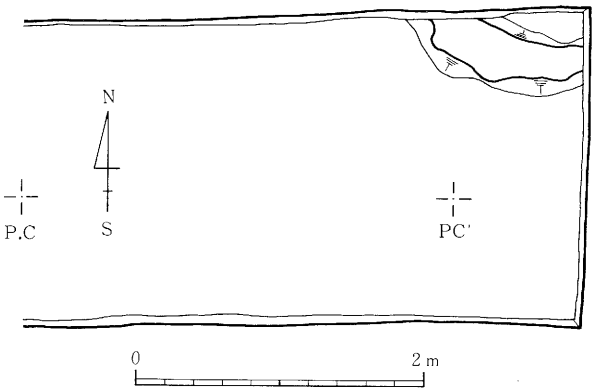
(3) 6b層上面：Aトレ北区6b層上面で、打ち込み杭を1本検出した。杭はやや斜めに打ち込まれており、先端は9層中まで到達している。6b層上面では、他に付属する遺構や杭は検出されていないため、用途・性格は不明である。

杭は樹種同定の結果、ケヤキであることが知られた。長さ50.9cm、径11cmである丸太材の一方の端の片側を大きく3回の削りによって、先端部を作り出している。



第13図　6b層上面検出杭セクション図

時期は、5層上面で杭の痕跡を確認していないことと、上部の欠損を考える場合、6a層は6b層の乱れた層であることから、6a層上面での打ち込みの可能性もある。いずれにせよ、5層が平安時代の水田と考えられることから、杭の時期はそれ以前、弥生時代以降である。



第14図　Bトレンチ7層上面平面図

(4) 7層上面：Bトレ北東コーナー付近で畦畔状の遺構が検出された。長さにして約1m10cmの検出であり、上端幅約35cm、下端幅約50cmで、方向は直線的ではなく明瞭ではない。高さは0.5～2cmと低い。7層上面では他に遺構は検出されていないが、この遺構が畦畔であるのか否かの判断は今後の課題といえよう。

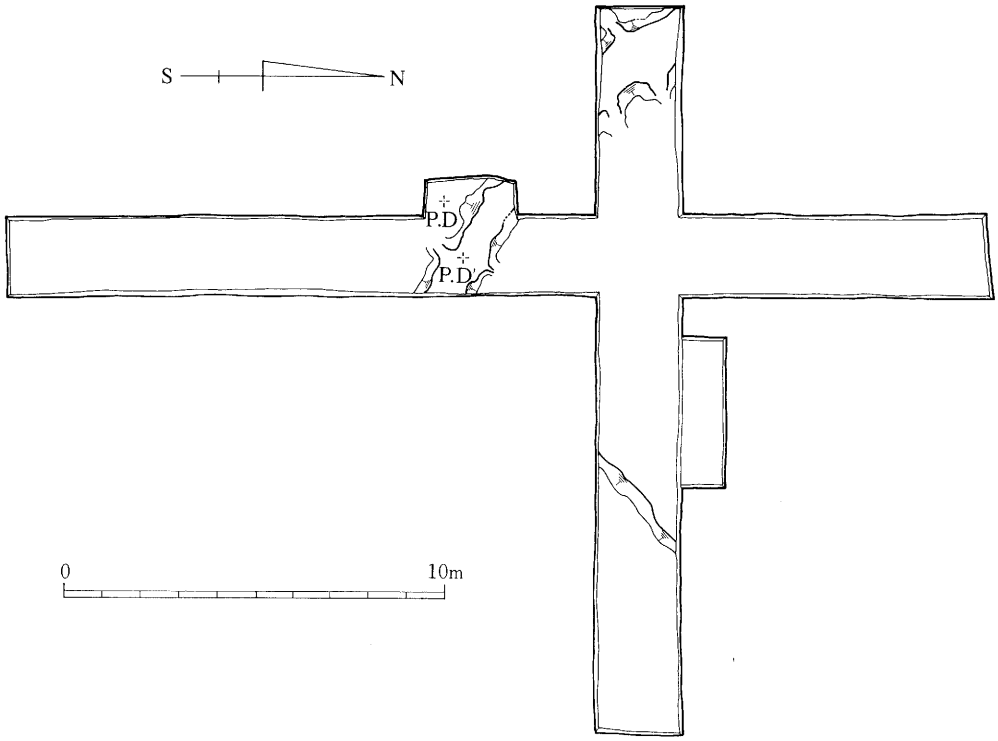
(5) 9層上面：9層上面では、Aトレ南区、Bトレ、Cトレで畦畔が検出され、水田跡の存在が明らかとなった。水田面の標高は8.4～8.5mである。

Aトレ南区とCトレで検出された幅の広い畦畔は、方向・形態・位置関係から連続するものと考えられ、この畦畔からほぼ直角方向に伸びる幅の狭い畦畔との比較から、ここでは前者を大畦、後者を小畦として述べていくことにする。大畦は、Aトレ南区では方向N−57°−W、上端幅71～106cm、下端幅118～146cmで、Cトレでは方向N−50°−W、上端幅115～122cm、下端幅約175cmである。断面形は扁平な台形状を呈し、畦畔の立ち上がりはゆるやかである。また大畦を形成している土と、耕作土は明瞭に区別はされない。水田面の高低は、大畦の南西側が北東側より高く、大畔の上面と水田面との比高差は、Aトレ南区では南西側で1～4cm、北東側で2～5cm、Cトレでは南西側で1～3cm、北東側で5～8cmである。小畦は、大畦から伸

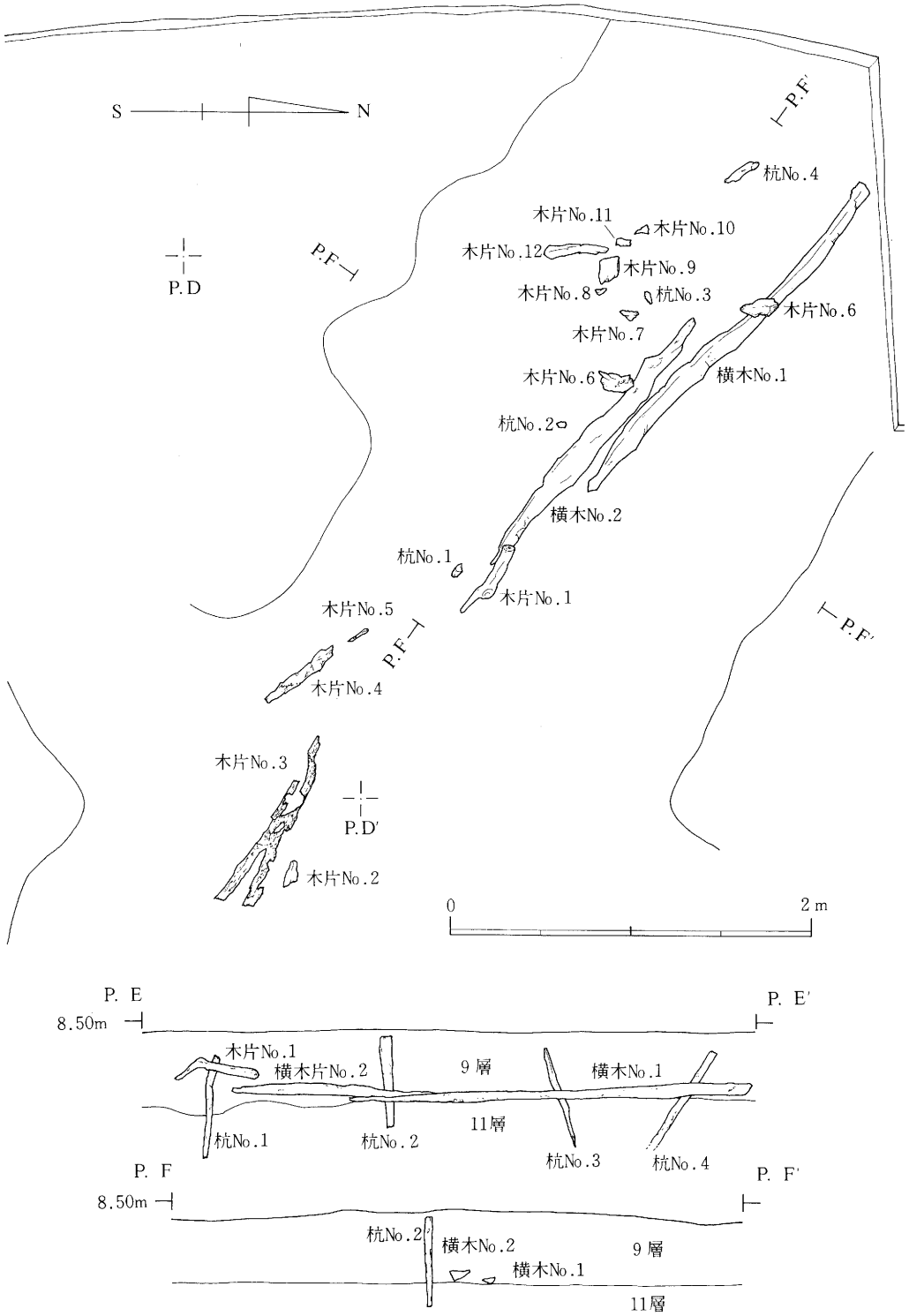
びる５本の他に、Ｂトレで検出されている。Ｂトレの畦畔は方向Ｎ－49°－Ｅで、東南側の立ち上がりのみが検出されている。水田面は東南側が北西側に比べ低い。小畦の形状はＡトレ南区Ｃトレでは、高さ約２～３cmと低く、上端幅は12～40cm、下端幅は40～60cmである。この９層上面で検出された水田跡の形態は、水田の一区画は把握されなかったが、大畦と小畦により水田が構成されている点や、大畦の方向、規模、断面形が、仙台市高速鉄道関係遺跡鳥居原・中谷地地区で検出された弥生時代中期[註4)]の水田跡に極めて類似している。さらに、両地区は立地も同様に後背湿地であり、層位的にも対応することから、当地区の水田跡の時期は弥生時代中期と考えられる。またこの水田跡は、水田土壌が泥炭質粘土層であることや、床土に酸化鉄の集積層が認められないことから、湿田と判断される。

さて、Ａトレの大畦では畦中から杭４本と横木２本、木片が12点出土した[註5)]。杭No.１～４は、大畦と同一方向に、そのほぼ中央に列をなしている。間隔は45～50cmである。４本とも掘り方をもたず、その検出は全て畦中であった。杭列はほぼ直線的で、方向はＮ－55°－Ｗである。さらに西北方へ伸びる可能性はあるが、Ｃトレの大畦では杭は検出されていない。この杭列の北東側のすぐ脇には、杭列に沿うように横木No.１・No.２が検出された。横木は２本とも平らな面を上にして、11層上面及びやや浮いた状態で検出された。木片は樹皮と木質部を残すものに分けられ、後者は焦痕のあるものがほとんどである。尚、杭・横木には焦痕のあるものはない。

これらの杭・横木・木片の素材については、尚絅女学院短期大学の木村中外氏に、杭No.３



第15図　９層上面平面図



第16図　Aトレンチ畦畔内出土遺物平面図・セクション図

杭No.4、横木No.2の樹種同定を依頼した。その結果杭No.3と横木No.2はヤナギ、杭No.4はサクラで、どちらも比較的軟らかい樹種であることが知られた。木村氏によると、ヤナギは河畔林を構成する重要な樹種であり、当地区の周辺ではサクラとともに容易に入手できるものであったろうとのことである。また杭No.3と杭No.2・横木No.1と横木No.2はそれぞれ接合し、肉眼観察ではあるが杭No.1と他の木質部を残す木片も全て杭No.3と横木No.2と極めて材質が似ておりヤナギと考えられる。また樹皮については、出土状況からヤナギの可能性も考えられる。

個々の遺物の形態については、杭・横木・木片の順に述べていくことにする。杭は4本検出されており、長さは25～35cm程である。これらの杭には共通する特徴が2点ある。第一には明瞭な加工痕がなく、より尖っている方を杭の先端としていること、第二には全て歪みを生じていることである。この歪みは杭の材質が軟かいことから打ち込みの加撃によるものと考えるのが妥当であるが、杭の頭部の観察では加撃痕はさほど明瞭でなく、後世の土圧などに起因することも考えられる。杭No.1～3は割材であり、断面形から杭No.1は直径4.5cm程の母材を縦に四分割したものの1点であり、接合する杭No.2とNo.3は、直径5.5cm程の母材を三分割したもののうちの2点である。杭No.4は丸杭であり、杭の頭は折られたような痕跡を呈し、先端は断面が半円形で、引きさいたような感じがする。横木はNo.1の長さが114cm、No.2が90.5cmである。接合したものの断面観察から母材の直径は9～10cm以上と考えられ、そこから断面三角形の割材をとり、さらに2つに割って横木としている。横木No.1の断面形は台形であり、No.2は三角形を呈す。木片はNo.1～12のうち、樹皮がNo.6～10である。木質部を残すものは、木片No.5の他は全て焦痕があり、No.4は木質部の残存状況は極めて悪い。木片No.1では片方の端が焼けており、加工痕が見られる。また先端には折れたような痕跡があることから、切断あるいは折りやすくするために焼いたものと考えることもできる。木片は他にCトレの畦中から2点、Aトレ北区北端の9層中からも1点出土している。材質は杭No.3、横木No.1に極めて似ており、すべて焦痕がある。

さて、Aトレ南区で検出された杭列及び横木、木片については、杭列と横木とによる遺構の存在が考えられる。これは、杭列と横木がほぼ平行していること、木片には細片が多く、焦痕のあるものがあるのに対し、杭と横木にはないこと、杭No.2とNo.3、横木No.1とNo.2はそれぞれ接合し、素材がヤナギで、割材であるとの共通点をもつことによる。杭と横木は畦中の検出であり、大畦構築以前の遺構と考えられ、杭列がほぼ直線的であり、その方向が大畦の方向と一致することは、広範な水田を作る際に大畦の方向を決定する施設、あるいは標示ではないかと想定される。大畦は横木・杭を覆うように、周囲の土を盛り上げて作られており、木片の存在は、杭と横木の製作が当地区で行なわれ、木片はその時に生じたもので、大畦構築時に周囲の土とともに混入したものと考えることもできよう。

ところで、この９層中にはモール状の植物遺体が多数残存しており、またＡトレ大畦中より種子が10数点検出されたため、これらを東北大学農学部の星川清親氏に同定を依頼した。同定の結果、植物遺体は、直立した茎をもつかなり大型の植物で、ガマかあるいは他の湿地性植物の可能性が考えられ、そのまわりや内部に多量の広葉樹の枯葉が混入していることが知られた。このことについて星川氏は、この植物が株状にはえていたところへ、微砂質の粘土を含む砂状土が洪水などにより運ばれてきて埋没し、何らかの理由で腐敗も炭化もせず保存されていたものと考えている。稲株ではないかとの期待は、残念ながら実らなかったが、今後、当地区と同様な立地、層位を示す条件のもとで稲株や湿地性の植物遺体が発見される可能性は十分にあるといえる。また、種子については、カヤツリグサ科のものであることが知られた。モール状の植物遺体とともに、当地区が湿地であったことを裏付けるものである。

５．出土遺物

遺物は総数74点が出土している。土器は破片だけであり、土師器片９点、須恵器片７点が出土している。土師器は全て表杉ノ入式で、糸切り痕を残す坏底部破片が１点みられる。８層中から出土した土器片は細片のため時期は不明である。陶器・磁器も破片だけであり、共に３点ずつ出土している。６ｂ層上面検出杭、９層中出土杭、横木、木片については前述の通りであり、樹種同定結果は第３表に示した。また他の層から出土した木片は、ほとんどが細片で、枝状のものが数点含まれていた。また、８層上面と８層中から出土したクルミは炭化も腐敗もし

第２表　出土遺物数量表

層　位	遺　物　数　量
１　層　中	磁器片２点
２層上面	須恵器片１点、土師器片１点、陶器片２点 木片１点
２　層　中	土師器片１点、陶器片１点、磁器片１点、 鉄砲玉１点、モモの種１点、木片６点
３　層　中	木片５点
４　層　中	須恵器片２点、土師器片１点、木片１点
４層下部	須恵器片13点、土師器片６点、木片１点
５　層　中	須恵器片１点、木片４点
６　層　中	木片４点
６ｂ層上面	杭を１本検出
８層上面	クルミ１点
８　層　中	土師器１点、クルミ１点、木片２点
９　層　中	杭４本、横木２本、木片15点
層位不明	寛永通宝１点

第３表　樹種同定表　　（木村中外氏による）

No.	遺　物　名	樹　　種
1	Ａトレ６ｂ層上面検出杭	ニレ科　ケヤキ
2	Ａトレ畦畔内出土杭No.２	ヤナギの一種　シロヤナギか？
3	Ａトレ畦畔内出土杭No.４	ヤナギの一種　シロヤナギか？
4	Ａトレ畦畔内出土横木No.２	バラ科　サクラの一種　ワウミズザクラか？

ておらず、極めて堅い。さて、出土遺物は数量的に、1～8層の木片が24点を占めることもあり、極めて少ないと言える。これは、当地区が後背湿地に立地し、主に生産域であったことと関連するものと考えられる。

6．まとめ

今回の富沢水田遺跡鳥居原地区の調査では、遺跡の範囲確認が主たる目的であった。調査成果、今後の課題は以下のように要約されよう。

1．2層上面、5層上面で畦畔が検出された。今後より広範な調査により水田跡の実態が把握されよう。2層上面の畦畔は、出土遺物などから極めて新しい時期のものであるとは考えられるが、その時期を明らかにする調査が必要とされる。5層上面の畦畔は、出土遺物、灰白色火山灰の存在から平安時代に属するものである。畦畔の方向が真北方向であることやその形態については、他遺跡との比較などから条里制への検討を加えていくべきであろう。

2．9層上面で弥生時代中期の水田跡が検出された。この水田跡は湿田と判断され、形態は大畦と小畦により構成されている。水田の一区画は把握されなかった。またAトレンチの大畦中からは、杭列・横木・木片が検出された。杭と横木はヤナギ、サクラを素材としており、接合関係が認められることや、杭列の方向と大畦の方向がほぼ一致することから、杭列・横木による畦畔構築のための遺構の存在を考えてみた。

3．6b層上面で検出した打ち込み杭、7層上面の畦畔状遺構については、6a層上面をも含めて遺構面の可能性を考慮した調査が必要とされる。

4．富沢水田遺跡の北東端に位置する当地区での上記の遺構の検出は、遺跡の範囲がさらに東方、北方へと広がっている可能性を示しており、東方にある自然堤防との関係をもふまえて、遺跡の構造、範囲を調査していく必要がある。

5．富沢水田遺跡の周囲には、自然堤防、段丘、丘陵といった集落の立地条件を十分に満たす地形が展開しており、遺跡の構造の究明とともに、これらの地形上に立地する集落跡との関係を把握していくことが今後の課題とされる。　（斎野　裕彦）

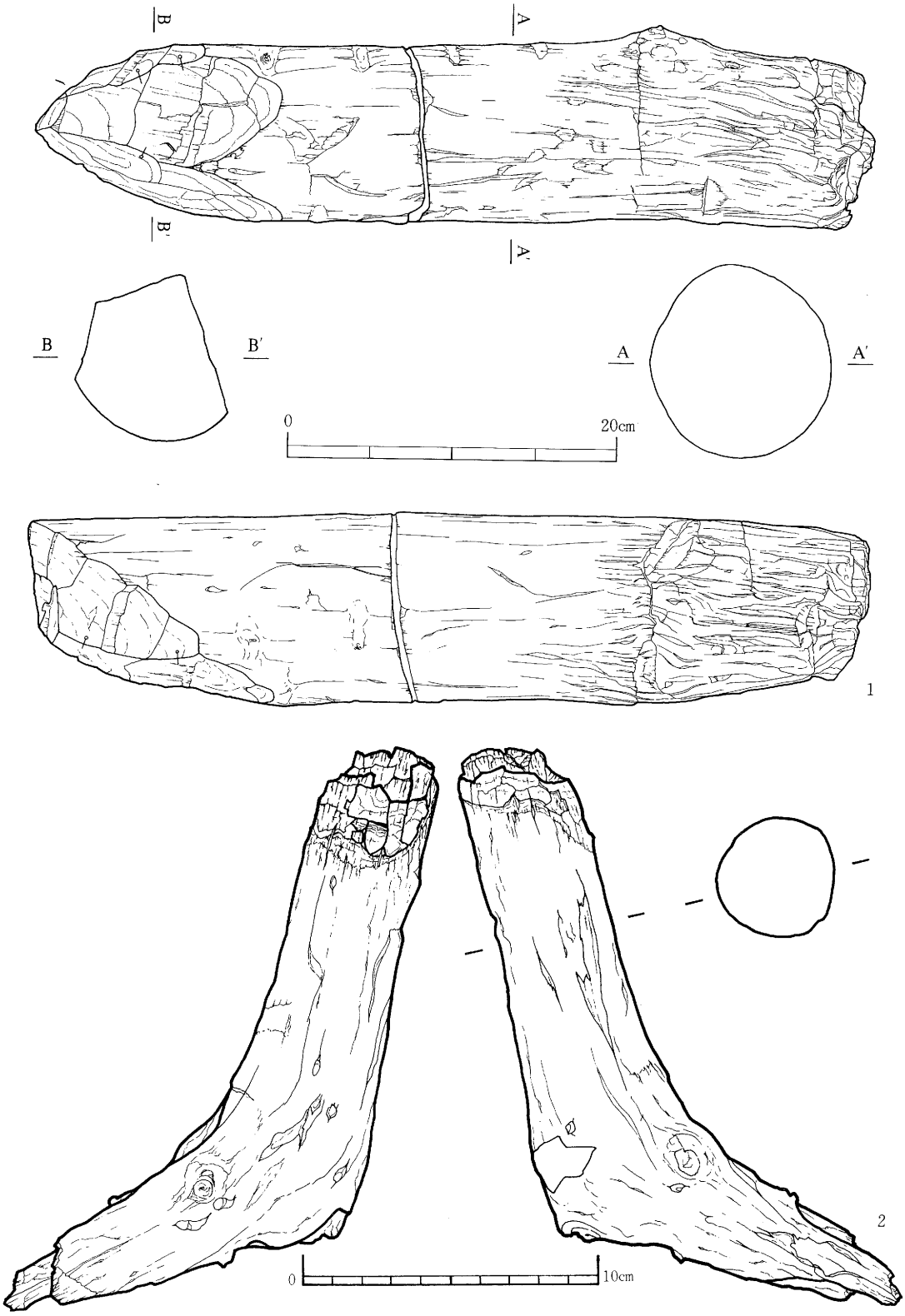
註1．阪口（1974）や那須・市原（1983）では、泥炭あるいは泥炭層について、土壌分析により植物遺体の含有量を基準として、泥炭・粘土質泥炭・泥炭質粘土、泥炭層・泥炭質粘土層などとよんでいる。しかし、当地区では土壌分析がなされていないため、これらの用語に明確に当てはめることはできない。そこで、ここでは泥炭を土壌形成の主たる要因としているとの意味で「泥炭質粘土層」とした。

註2．庄子貞雄・山田一郎：1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡－昭和54年度発掘調査概報－』P97～102

註3．この凝灰岩の鑑定は東北大学農学部山田一郎氏による。山田氏によれば、凝灰岩は西方の青葉山丘陵に見られることから、洪水などにより運ばれてきたものであろうとのことであった。

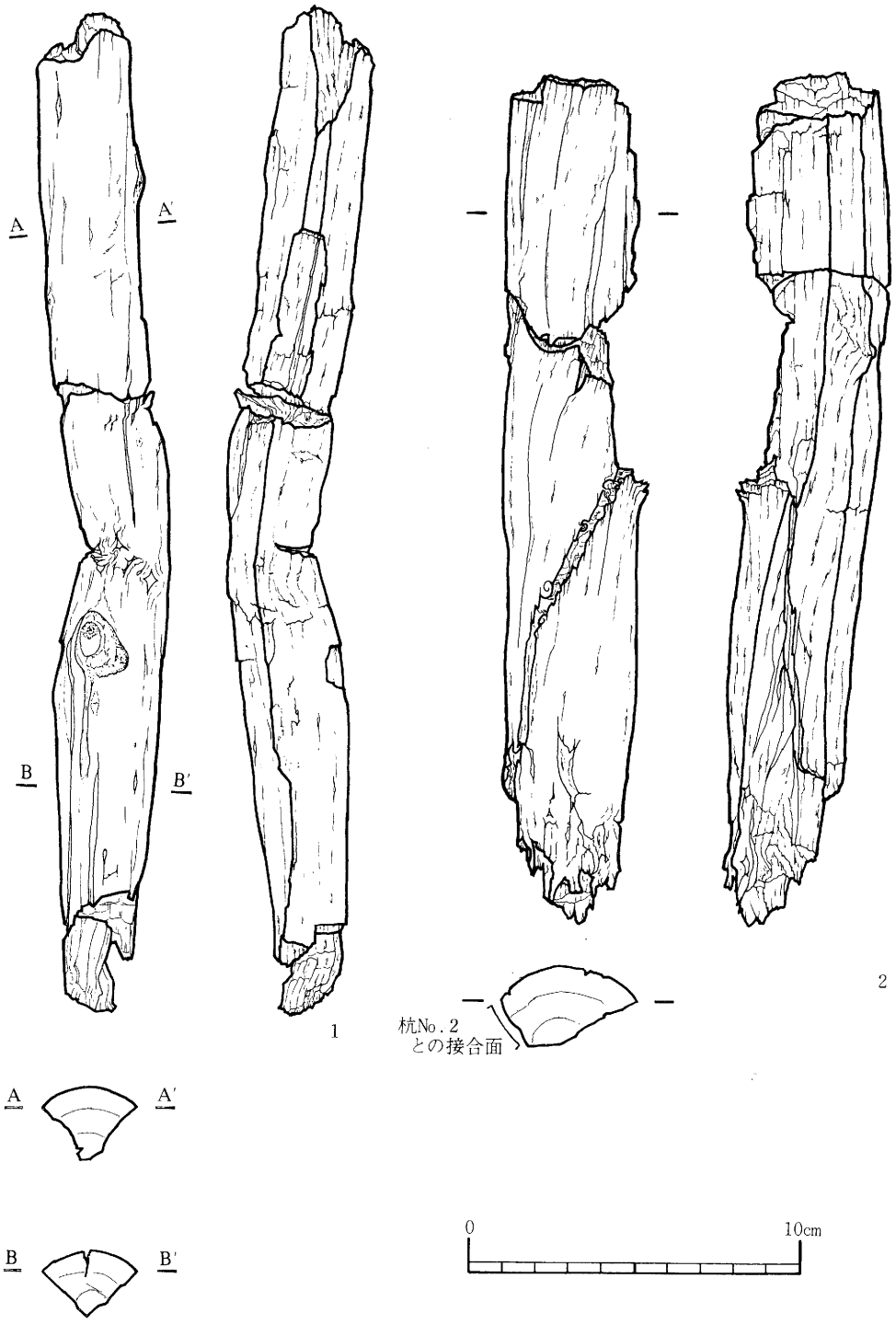
註4．荒井格　1984「富沢水田遺跡鳥居原・中谷地地区」『仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査概報Ⅲ』

註5．これらの中で、木片№6、木片№9、及び9層の土壌サンプルは、現在東北大学理学部小元久仁夫氏に依頼して^{14}C年代測定法による年代の測定が行なわれている。



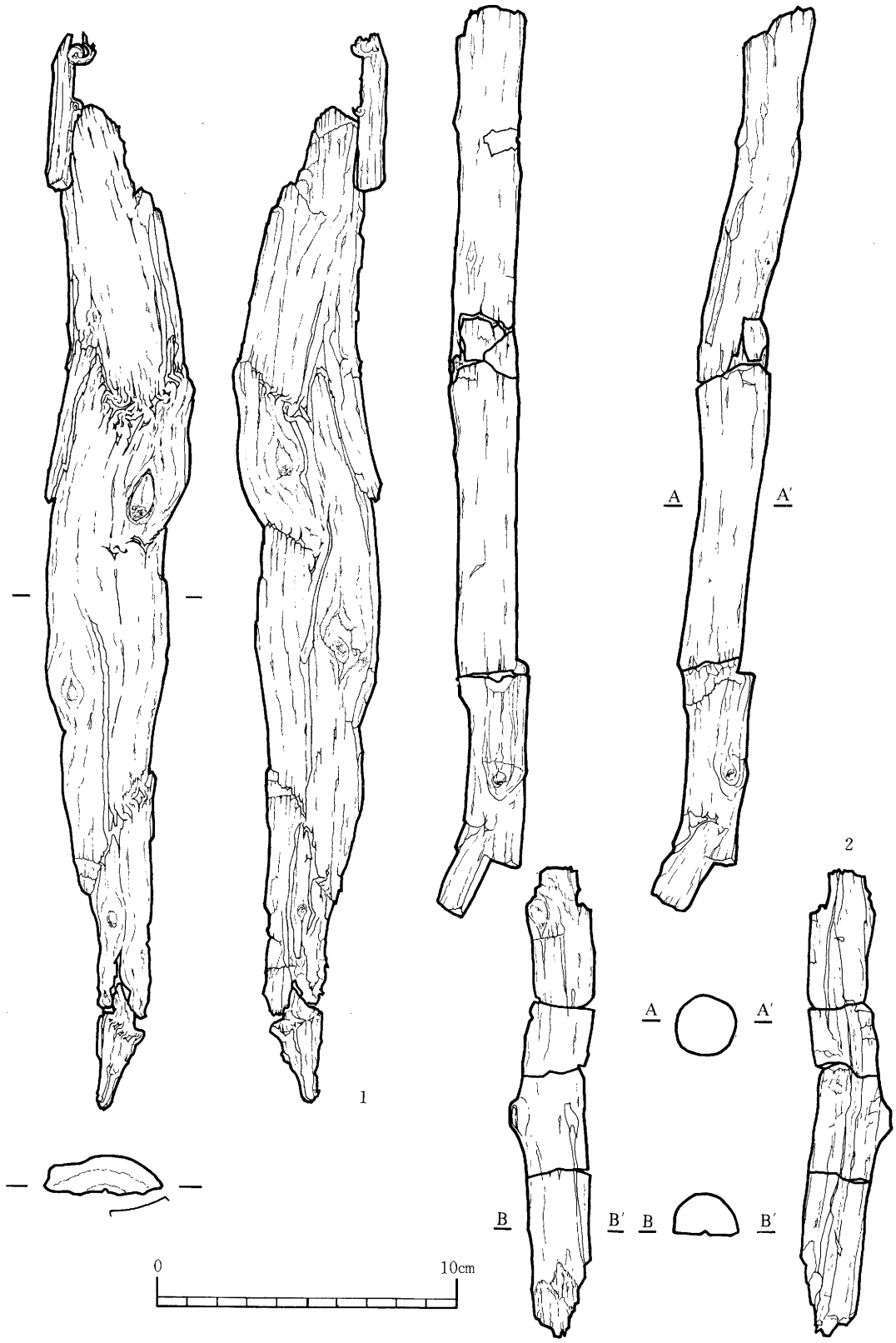
1．6ｂ層上面検出杭：長さ50.9cm 径11.0cm素材ケヤキ　2．9層中出土木片No.1：長さ23.3cm径4cm 素材ヤナギ？

第17図　遺物実測図（1）



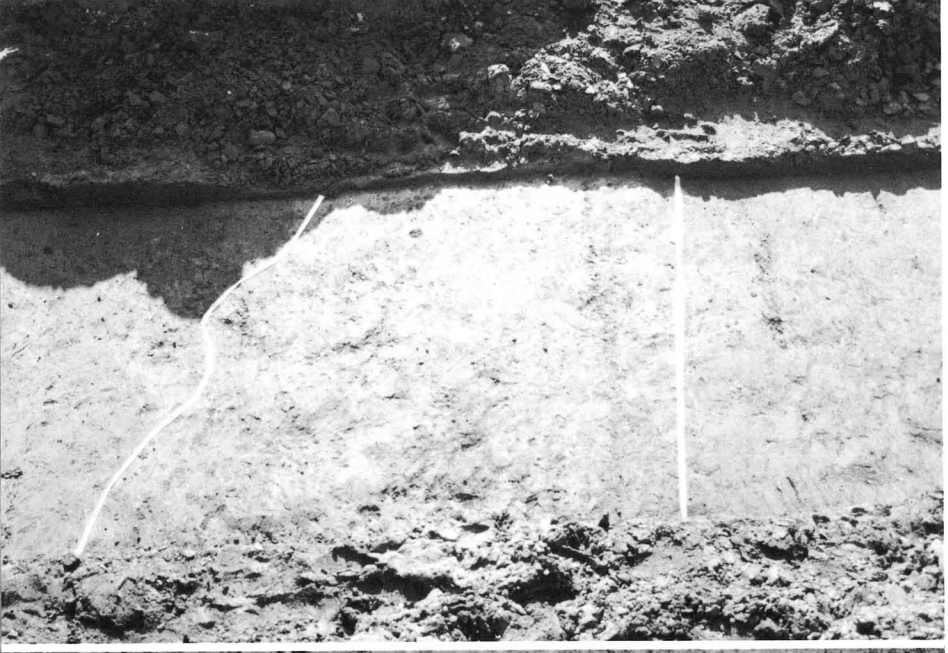
1．9層中出土杭No.1：長さ30.0cm幅3.2cm素材ヤナギ？　2．9層中出土杭No.2：長さ25.8cm幅4.1cm素材ヤナギ

第18図　遺物実測図（2）

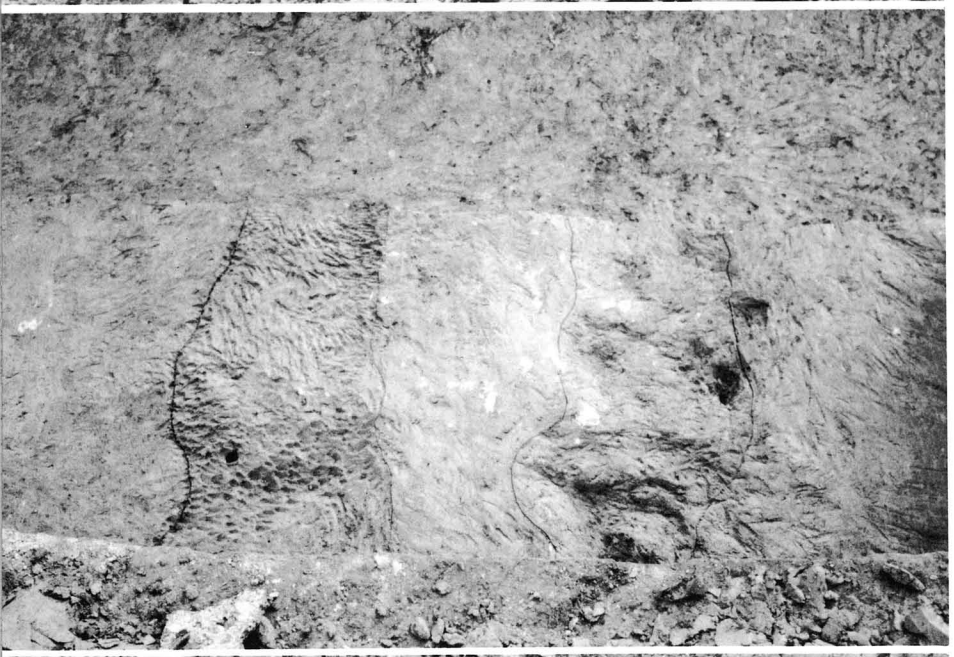


1．9層中出土杭No.3：長さ35.8cm幅4cm素材ヤナギ　　2．9層中出土杭No.4：長さ30.2cm以上 径2cm素材サクラ

第19図　遺物実測図（3）

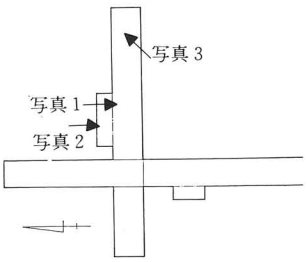


1．Bトレンチ
2層上面畦畔遺構



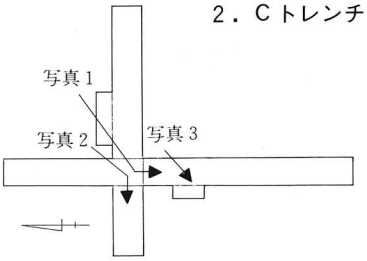
2．Bトレンチ拡張区
5層上面畦畔遺構

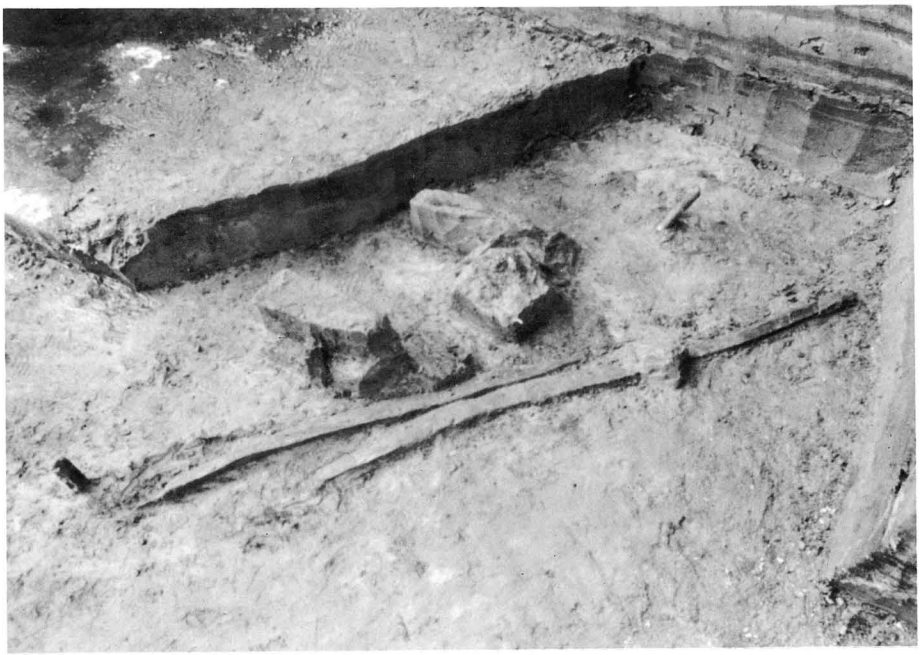
3．Bトレンチ
7層上面畦畔状遺構



1．Ａトレンチ南区９層上面全景

2．Ｃトレンチ９層上面全景

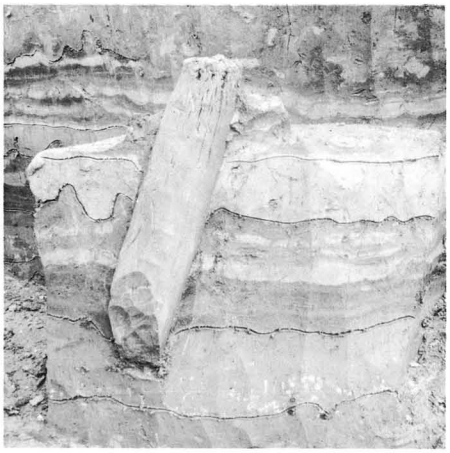




3．Ａトレンチ南区・拡張区畦畔内遺物出土状況

1．Aトレンチ完掘状況

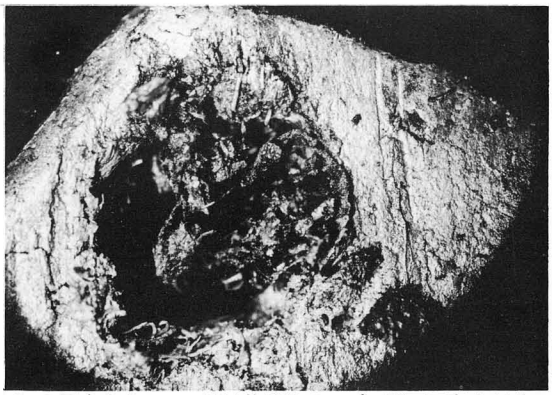
2．B・Cトレンチ完掘状況



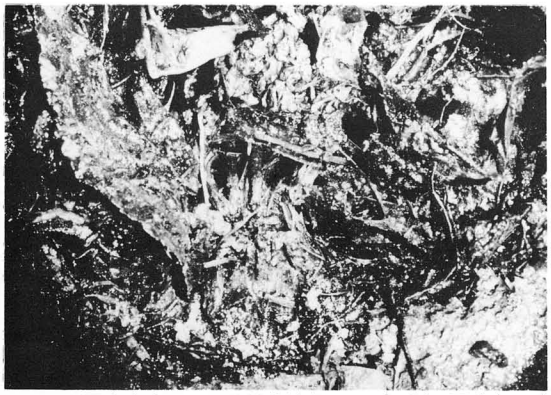
3．6b層上面検出杭セクション

4．Aトレ南区9層中杭No 2出土状況

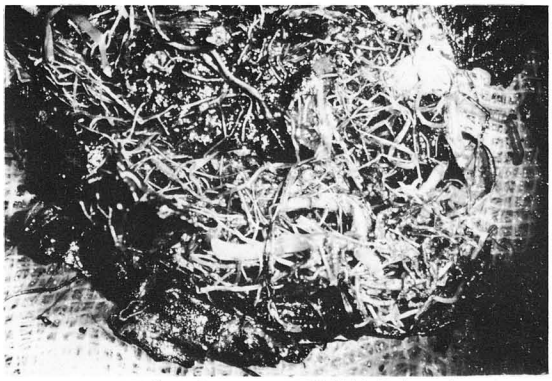
5．Cトレ南壁9層上面検出畦畔セクション



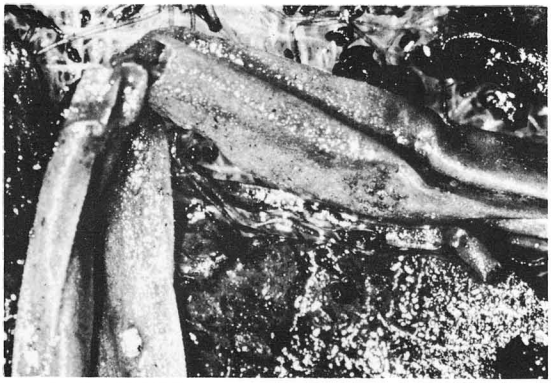
6．9層中出土モール状植物遺体サンプル断面写真（×4/3）



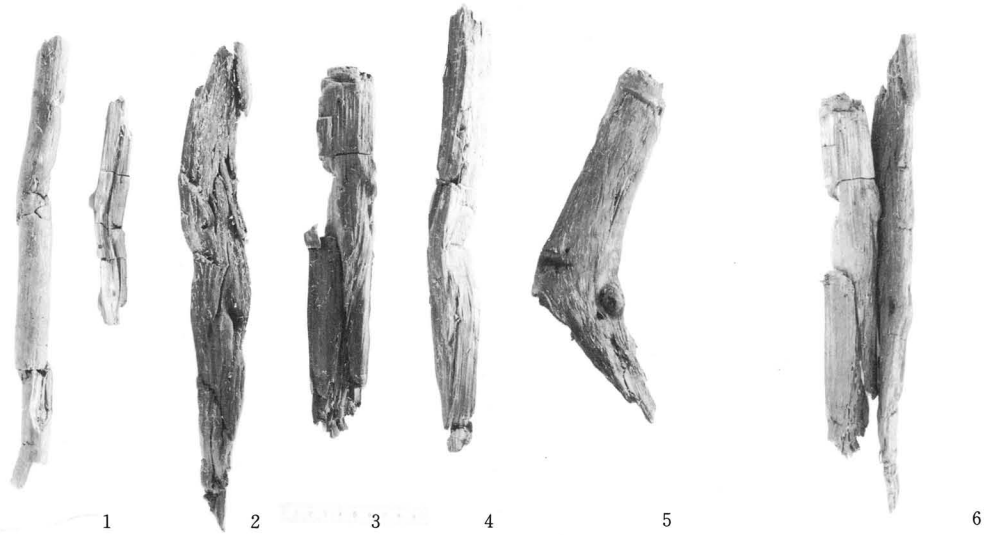
7．9層中出土モール状植物遺体サンプル断面写真（×4）

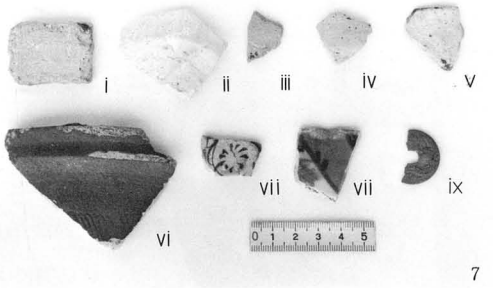


8．9層中出土モール状植物遺体（×4）



9．9層中出土モール状植物遺体（×8）





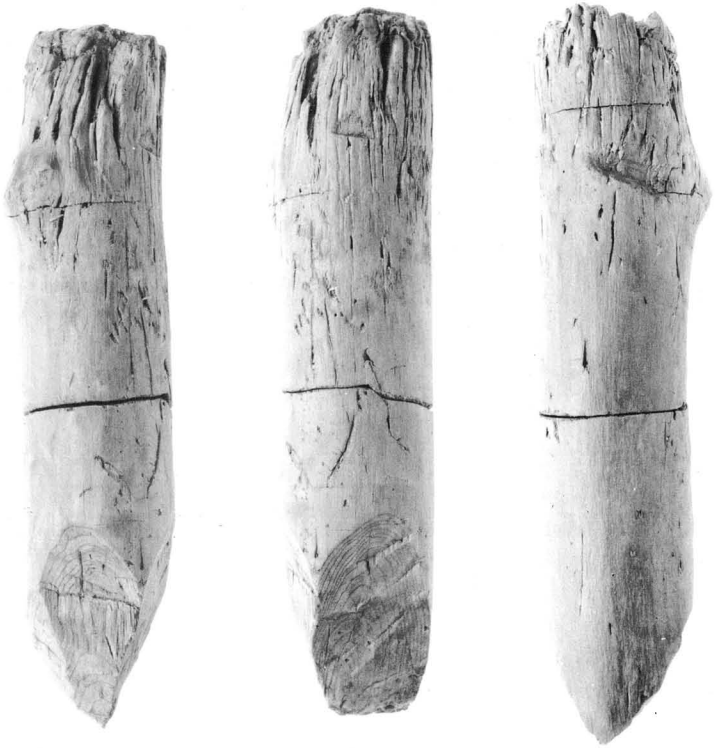
出土遺物写真（1）

1．9層中出土杭No.1　2．9層中出土杭No.2　3．9層中出土杭No.3　4．9層中出土杭No.4
5．9層中出土木片No.1　6．9層中出土杭No.2 —No.3接合状況　7－ⅰ須恵器片（Aトレ2層上面）
7－ⅱ須恵器片（Aトレ北区・4層中）　7－ⅲ須恵器片（Aトレ北区4層下部）　7－ⅳ土師器片（Aトレ南区2層中）
7－ⅴ土師器片（Bトレ4層下部）　7－ⅵ陶器片（Aトレ南区2層中）　7－ⅶ陶器片（Bトレ2層中）
7－ⅷ磁器片（Aトレ南区2層中）　7－Ⅸ古銭・寛永通宝（地点・層位不明）　8－ⅰクルミ（Aトレ北区8層上面）
8－ⅱクルミ（Bトレ8層中）　8－ⅲモモの種（Bトレ2層中）　8－ⅳ鉄砲玉（Aトレ北区2層中）

1

2

3



4

出土遺物写真（2）

1．9層中出土横木No.2長さ90.5cm　　2．9層中出土横木No.1 —No.2接合状況

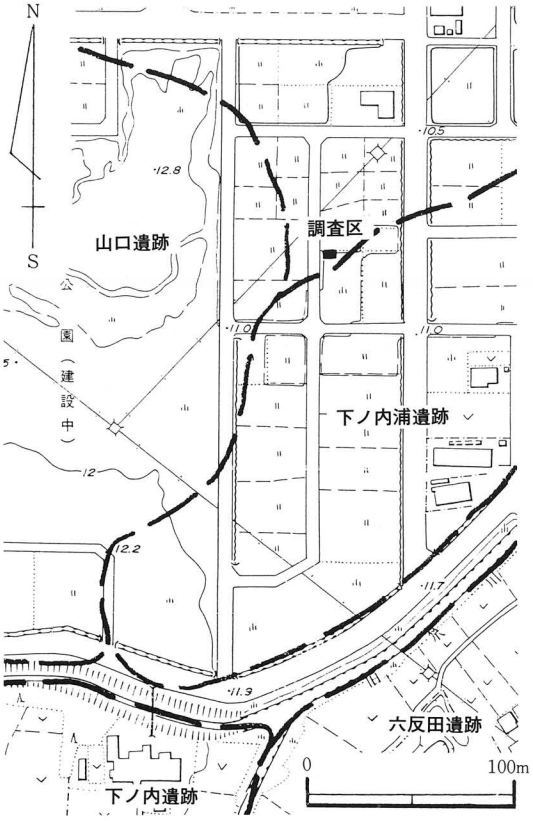
3．9層中出土横木No.1長さ114cm　　4．6層上面検出杭長さ50.9cm 径11cm

下ノ内浦地区

1．調査に至る経過

仙台市長町南三丁目39―10、小関正美・久男氏より、富沢字中谷地30―1・下ノ内浦32において店舗付き共同住宅建築のため、昭和58年9月17日付けで発掘届が提出されたので、昭和58年10月、基礎工事開始前に試掘調査を実施した。その結果、盛土および旧水田床土の下層の黒褐色粘土質シルト層上面で溝状の遺構と土師器片を発見したため、遺跡保存の見地から設計変更を要請し協議を重ねたが、工法上の理由からパイルを打たざるを得ないため、極力盛土を厚く施し、基礎工事による掘削が遺構面に及ばないように指導した。しかし、浄化槽部分については掘削が深いため、この部分については遺構確認調査を行った。

昭和58年11月、敷地北側に東西7m、南北3mの方形のトレンチを設定し、重機を用いて盛土・旧耕作土を排土した。5・8層で遺構を検出し、16層（標高9.6m）まで精査を行った。



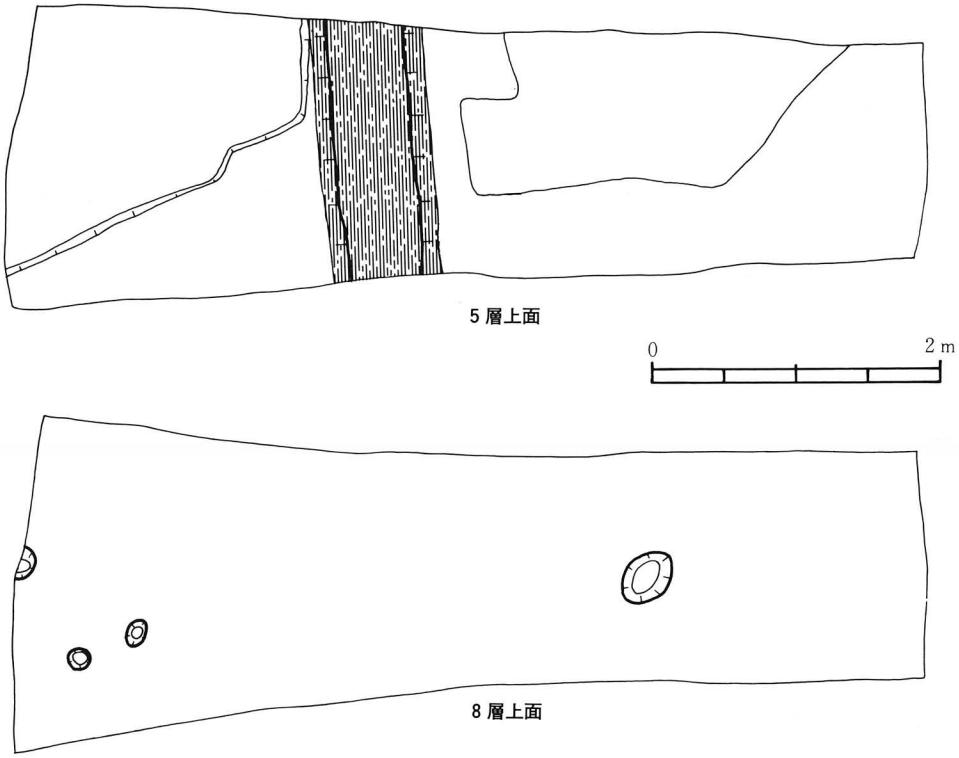
第20図　調査区設定図

2．発見遺構・出土遺物

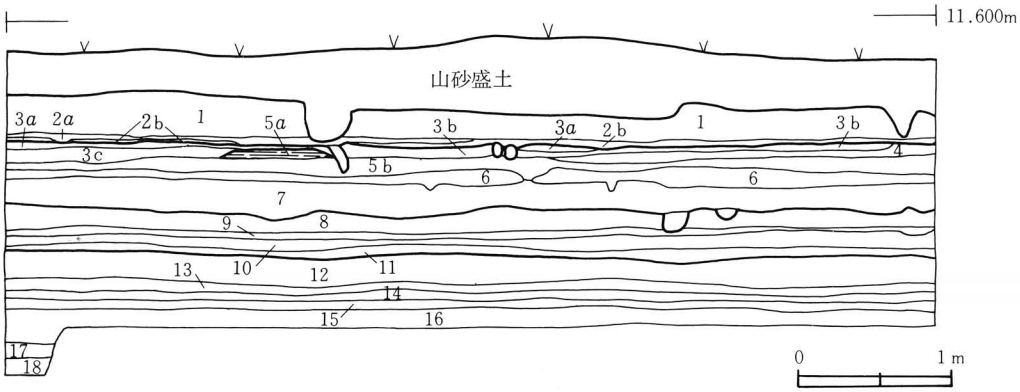
旧水田床土を掘り下げた5層上面で南北方向に延びる畦畔状の盛り上がりを1条を検出した。標高は10.7m前後である。上幅50～55cm、比高は2～5cm、長さ2.4m以上である。水田跡と断定することはできないが、5層上面でロクロ使用の内黒土師器坏の底部破片を出土し、かつ5層中から灰白色火山灰を斑点状に含むことから、平安時代頃の遺構と捉えられる。

さらに、8層上面でピットを検出した。標高は10.4m前後である。検出した4個のピットは検出面での平面形がほぼ円形で、直径15～40cm、深さ2～12cm、堆積土は黒褐色ないし黒色の粘土質シルトで、出土遺物はない。

以後、16層まで各層上面の精査を行ったが、プランを検出することはできなかった。



第21図　遺構平面図



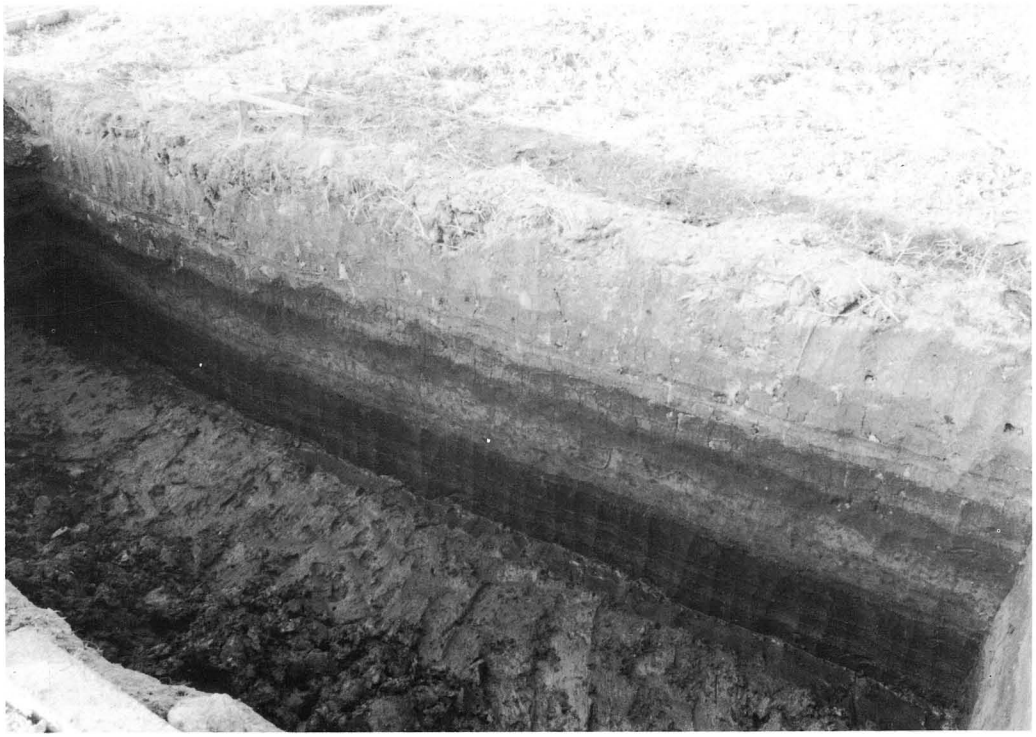
1	10YR4/1	褐灰色	シルト	8	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト
2a	7.5YR5/6	明褐色	シルト	9	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト
2b	7.5YR5/1	明褐色	シルト	10	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト
3a	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	11	10YR4/2	灰黄褐色	シルト
3b	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	12	10YR2/1	黒色	粘土
3c	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	13	10YR3/1	黒褐色	粘土
4	10YR5/6	黄褐色	シルト	14	2.5Y 3/1	黒褐色	粘土
5a	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	15	5Y 4/1	灰色	粘土
5b	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	16	2.5Y 2/1	黒色	粘土
6	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	17	10YR2/1	黒色	粘土
7	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	18	2.5YR2/1	黒色	粘土

第22図　調査区北壁セクション図

3．まとめ

今回の調査の結果、下ノ内浦遺跡の北側にも、畦畔状の遺構の存在が確認された。このような水田遺跡は、名取川の支流である旧笊川の後背湿地一帯に広がりを示すものであろう。また、この周辺の調査では、遺構が重層的に検出されており、充分な調査体制を組み、各々の調査結果を有機的に結びつける必要がある。　　（金森　安孝）

5層上面遺構検出状況（西より）



調査区北壁断面

〔2〕郡 山 遺 跡

1．遺跡の位置と環境

郡山遺跡は仙台市郡山二～六丁目に及び、西は東北本線から東は仙台バイパスまで、南は諏訪神社から北は八本松との境界まで、東西800m、南北900mの広がりが考えられる。この中で、推定方四町外郭線の官衙ブロックは中央北寄りの一角を占めている。

遺跡の北側は広瀬川が形成した標高10～12mの自然堤防で、南につれて低くなり、標高6～8mの名取川の氾濫原へと移行する北高南低の土地である。

遺跡の周辺には、北西部に縄文・弥生土器を出土する西台畑遺跡、南方部に的場・篭ノ瀬遺跡、南東部に矢来・欠ノ上Ⅰ・欠ノ上Ⅱ・欠ノ上Ⅲ遺跡がある。また東部には、15世紀に粟野大膳が居館とし、後に伊達政宗が居城とした北目城跡がある。さらに周辺には、14世紀初めの古碑群が点在しており、先史時代から古代・中世・近世を経て現在まで連綿と文化が受け継がれてきた地域であるといえる。

2．調査概要

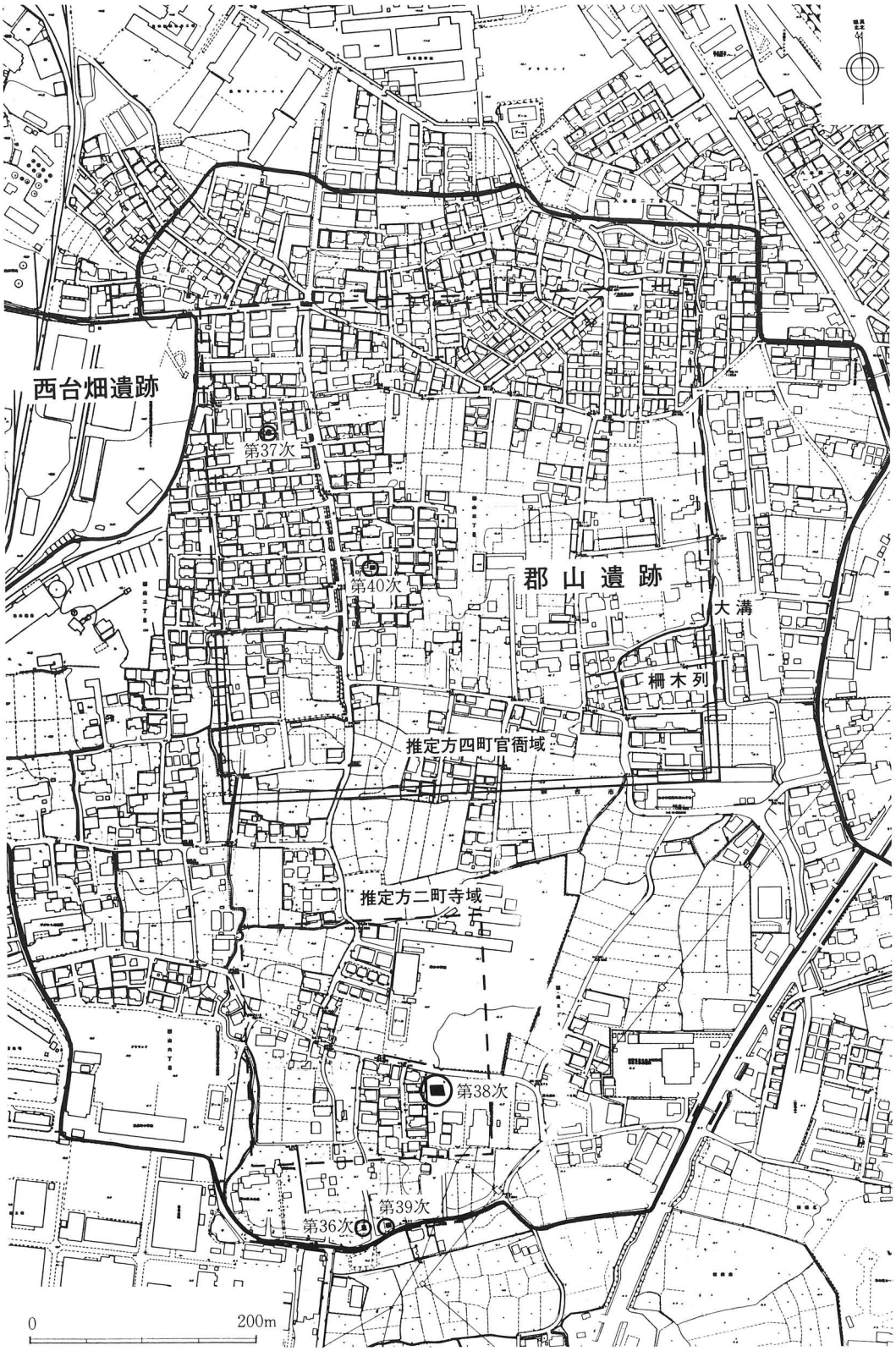
郡山遺跡の発掘調査の詳細については、仙台市文化財調査報告書第64集「郡山遺跡Ⅳ――昭和58年度発掘調査概報」に記述し、本報告書では概要にとどめる。

(1) **第36･39次発掘調査**：調査区は、推定方二町寺域の南外側、瓦を多量に出土する諏訪神社の南東にあたる。両調査区とも南側に緩やかに落ち込む地山面を検出し、また、これらの調査区の南側は約1m程標高の低い水田地帯となっていることから、旧河道と推定され、官衙に関わる遺構等は検出されなかった。

(2) **第37次発掘調査**：調査区は、推定方四町官衙域内、南辺より北に3町、推定西辺より東に約半町の位置にあたり、第35次調査で検出したSA386一本柱列、SD385溝跡の西側延長線上である。盛土の土量が多かったため、小さな面積の調査にとどまったが、旧水田床土底面の標高は、第35次調査で検出した遺構の基底面よりも低く、遺構等は削平されているものと考えられる。

(3) **第38次発掘調査**：調査区は、推定方二町寺域内南地区で、基壇建物跡を検出した第12次調査の南東60m、木簡を出土した第15次調査の南40mの位置にあたる。竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、土壙8基、溝跡5条、ピット108を検出した。

SI458住居跡　一辺5mの方形のプランと考えられるが、南半は調査区外で、全形・規模は不明である。周溝が巡り、床面には全域に貼床がみられる。北西壁にカマドを有し、長さ1.6mの煙道がみられる。主柱穴は不明で、煙道・カマドを通る中軸線は、N－39°－Wである。SK


西台畑遺跡
第37次
第40次
郡山遺跡
大溝
柵木列
推定方四町官衙域
推定方二町寺域
第38次
第39次
第36次
0
200m

第23図　調査区位置図

453土壙、ＳＤ461溝跡に切られている。土師器坏・甕、須恵器甕、鴟尾、鉄滓を出土している。

ＳＩ462住居跡　南辺長3.2m、西辺長2.5mの隅丸方形のプランと考えられるが、北東部は調査区外で、全形・規模は不明である。東壁南寄りにカマドを有し、両側に袖石を配し、左袖外側から煙道にかけて平瓦を据え立てている。また燃焼部からは天井部に施設したと考えられる凝灰岩切石を出土した。煙道は長さ1.3m、中軸線は、Ｅ－２°－Ｓである。ＳＩ463住居跡を切り、ＳＫ460土壙に切られている。土師器坏・甕、須恵器壺、単弁蓮華文軒丸瓦、樋巻き作り平瓦、刀子、鉄滓、小玉石を出土している。

ＳＩ463住居跡　一辺約５ｍの隅丸方形のプランと考えられるが、西コーナーは調査区外で全形・規模は不明である。周溝が巡り、床面には全域に貼床がみられる。北東壁中央にカマドを有し、長さ1.8mの煙道がみられる。主柱穴は４個検出され、柱穴掘り方は不整円形で、直径60～80cm、床面からの深さは40～70cmである。中軸線は、Ｅ－33°－Ｎである。北西壁中央部付近の貼床の下部から、炭・焼土を検出し、旧カマドの存在も推測される。ＳＩ462住居跡、ＳＫ460・465土壙、ＳＤ457溝跡に切られている。土師器坏・高坏・甕、須恵器甕・蓋、鉄滓を出土している。

ＳＢ454建物跡　東西３間以上(柱間寸法160～190cm)、南北１間以上（柱間寸法190cm)、東西柱列方向はＥ－30°－Ｓである。柱穴掘り方は一辺40～70cmの不整形で、深さ30～50cm、柱痕跡は直径20cm前後である。

これらの遺構は、出土遺物、転用材としての瓦の使用状況からみても官衙に関連する遺構と考えられるが、寺院との関連については不明である。

(4) 第40次発掘調査：調査区は、推定方四町官衙域の中央、やや西寄りにあたり、第24次調査の南西100ｍに位置する。大量の土採りが行われた形跡がみられ、旧水田床土の標高は近辺で検出した遺構の基底面よりも低く、既に遺構等は削平されたものと考えられる。（金森　安孝）

職　員　録

社会教育課

課　長	永野昌一
主　幹	早坂春一

文化財管理係

係　長	大沢隆夫
主　事	岩沢克輔
〃	山口　宏
〃	

文化財調査係

係　長	佐藤　隆
教　諭	渡辺忠彦
〃	佐藤　裕
主　事	田中則和
〃	結城慎一
〃	成瀬　茂
〃	菅原和夫
教　諭	青沼一民
主　事	柳沢みどり
〃	木村浩二
〃	篠原信彦
〃	佐藤　洋
〃	金森安孝
〃	佐藤甲二
〃	吉岡恭平
〃	工藤哲司
〃	渡部弘美
教　諭	渡辺　誠
主　事	主浜光朗
〃	斎野裕彦
〃	長島栄一
〃	荒井　格
派遣職員	高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横沢穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡－範囲確認調査報告書－（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和53年3月）
第22集　経ケ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ－昭和55年度発掘調査概報－（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ－昭和56年度発掘調査報告書－（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ－昭和56年度発掘調査概報－（昭和57年3月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年3月）
第41集　年報3（昭和57年3月）
第42集　郡山遺跡－宅地造成に伴う緊急発掘調査－（昭和57年3月）
第43集　栗遺跡（昭和57年8月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭－茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書－（昭和58年3月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ－昭和57年度発掘調査概要－（昭和58年3月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ－昭和57年度発掘調査報告書－（昭和58年3月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年3月）
第50集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
第52集　南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
第53集　中田畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）

第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第55集　南小泉遺跡－青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年３月）
第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡（昭和58年３月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年３月）
第60集　南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書－（昭和58年３月）
第61集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和59年３月）
第62集　燕沢遺跡（昭和59年３月）
第63集　史跡陸奥国分寺跡－昭和58年度環境整備予備調査概報－（昭和59年３月）
第64集　郡山遺跡Ⅳ－昭和58年度発掘調査概報－（昭和59年３月）
第65集　仙台平野の遺跡群Ⅲ－昭和58年度発掘調査報告書－（昭和59年３月）

仙台市文化財調査報告書第65集

仙台平野の遺跡群Ⅲ

昭和59年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　㈱東北プリント
仙台市立町24－24　TEL 63－1166